祇候ノ人々

三條西實隆ニ天盃扇ヲ賜フ
勝仁親王御盃ヲ賜フ

しこうにて、へちして御さか月たふ、しつかゐ八こんゟ、御ひし〳〵にてめてたし、○下略

〔實隆公記〕二月二日、辛卯、天顔快晴、早朝小浴、梳髪、今日禁裏内々例年申沙汰也、一種・一桶進上之、及晩參内、三獻已終程也、參候人々、源大納言（庭田雅行）・新大納言（松木宗綱）・按（甘露寺親長）察・滋野井中納言（教國）・權中納言（正親町公兼）・右衛門督（四辻季經）・下官・民部卿（白川忠富）・前源宰相（綾小路俊量）・山科宰相（言國）・以量朝臣（萬里小路）・賢房（唐橋）・在數・菅原爲學（五條）等也、七獻之時、予候御酌、此時以天酌賜天盃、被下御扇、今年今日初而出仕之謂也、祝著滿足者也、今日當番之間候黒戸、賢房同祇候、於親王（勝仁親王）御方賜御盃、祝著々々、○下略

四日、癸巳、雨降、○中略自禁裏拜領之扇、遣等壽喝食了、○下略

〔實隆公記長享三年春夏紙背文書〕○二月七日八日裏

（長享三年二月二日）昨日は御しこう候て、めてたくおほしめし候、○下略

〔親長卿記〕正月卅日、晴、○中略民部卿以回文相觸之、明後日二日、例年申沙汰云々、一種・御銚子提可持參、巳尅加奉了、○下略

二月二日、晴、申尅許參内、年始例年申沙汰、御銚子提器酒一種、土參仕人々、源大納言・新大納言・予・滋野井中納言・權中納言・右衛門督・侍從中納言・民部卿・前源宰相・山科宰相・以量朝臣・在數・菅原爲學等也、五獻之後退出、

門跡尼宮廷臣及ビ宮女酒饌ヲ獻ズ

庭田雅行
勝仁親王御參内
大典侍
三條西實隆

〔久守記〕○宮内廳書陵部所藏　二月二日、晴、辛卯、一禁裏御一獻、各申御沙汰、土器一、今日ツクミコサシ代六十四文參候也、

○コノ後、門跡・尼宮・廷臣及ビ宮女等、酒饌ヲ獻ズルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　三月十四日、○中略こん部卿のあちや〳〵、御さかいりて、御いわゐあり、雨ふる、

四月七日、○中略源大納言より御しきろう・御たるまいりて、小御所にて御さか月ゟ、宮の御かたもなる、大すもしよりも御てうしゟ、

五月十日、○中略新大納言（三條西實隆）こもし・すゝきなとにて、御たる一かまいらせらるゝ、源大納言をもめして、御しやうくわんあり、御さか月三こんゟ、○下略

〔實隆公記〕五月十日、丁卯、天晴、○中略自御牧、鯉二・鱸一送之、仍一荷相副之進上之處、夕供御則御賞翫、入夜於常御所庇被下御盃、有三獻、上臈・大納言典侍・目々典侍・勾當内侍・中内侍・伊與・御今參等被候、源大納言・以量朝臣・菅原爲學等祇候、

安禪寺惠春尼
大慈光院宮
聯輝軒永崇
中西六郎歌舞アリ
甘露寺親長申沙汰

三獻之時、予天盃頂戴之、擬上蔦局、事了分散、略○下

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　五月廿六日、おとこたち申さた、御てうし、御かわらけの物ゟ、あんせん寺との（芳郊惠春尼）・おかとのより（大慈光院宮）、御かはらけの物・御たる一つゝゟ、れんきより（雜山永崇）御かハらけの物三色・御たる一かゟ、新大納言よりむめ御たる一ゟ、六らう（中西）人五六人つれてまいりてうたふ、御ひし〳〵とめてたし、略○下

（頭書）（尊傳親王）「二宮の御かたもなしまいらるゝ、三宮（仁尊）の御方もなる、」

廿七日、略○中二宮の御かた、夕かたくわん御なる、略○下

廿八日、略○中三宮の御かた、くわんきよなる、

〔親長卿記〕五月廿五日、晴、略○中明日可有一獻、如年始可致沙汰、可參之由民部卿觸之、回文加奉了、一獻十疋云々、進長橋局畢、土器物明日可進也、

廿六日、晴、如夕立之雨一兩度降了、參内、申剋許、今日内々一獻申沙汰也、近面（臣カ）也、中御門（宣胤）新大納言・新大納言實隆、・前權中納言公兼（正親町）、・右衛門督（四辻季經）・在數（唐橋）等、不參、前權中納言、聊有恐怖事歟、龜大夫□六七輩參入、有歌舞、

〔實隆公記〕五月廿六日、癸未、雨降、今日内々申沙汰也云々、雖然予先日令進上種

之間、不可催之由衆議云々、内々可祇候之由、昨日民部卿（白川忠富）雖相談、依故障不參之處、以女房奉書有召、猶不參、梅子一折敷・樽一進上之了、今日美聲等有興云々、略○下

〔實隆公記長享三年春夏紙背文書〕○五月二十八日至六月五日裏

御返事のやう、ひろうして候、さやうにみん部卿申候とも御しり候ハて、めつらしきうたに候ほとに、おほせられ候へハ、御しこうハ候ハて、御たるまいらせられ候、きよくも候ハすおほしめし候、さりなから、おもしろくおほしめし候よし、よく心え候て申とて候、申ましき間をかやうに大すけ殿より御事つけ、さま〳〵めつらしきものゝしこうにて候に「　」申候へとて候、かしく、

（紙封ウハ書）「御返事　申給へ」

〔久守記〕○宮内廳書陵部所藏　五月廿六日、晴、夕立兩度候也、癸未、

一禁裏御一獻、近進（臣）申御沙汰候也、本所（山科言國）二十疋・土器物一、カラスミ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　六月五日、略○中ふと御てうしともまいらせらるゝ、小御所にてゟ、略○下

〔久守記〕○宮内廳書陵部所藏　六月五日、晴、壬辰、

一本所（山科言國）御番御参候、略○中御銚子提申御沙汰候也、略○下

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　九月十九日、雨ふる、略○中あんせん寺殿（芳桐喜春尼）・れんき（就山永崇）・はんせう（宗山等貴）・女中・ない〳〵のおとこたち御てうし事ありて、八らう・九らうにわかにめして夜に入てまゝせらるゝ、略○中まゐにとんすをたふ、

安禪寺惠春尼聯輝軒永崇萬松軒等貴申沙汰

四日、癸巳、山城白雲寺寓住僧一勤ヲ、勝仁親王御所ニ召シテ、毛詩ヲ講ゼシメラル、

禁裏ハ憚アルニ依リテ勝仁親王御所ノ廂ニ祗候シテ開講ス

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月四日、はくうんに一こんとて、らうそく（うか）のあるか、たんきなとよく申よしきこしめして、毛詩をよませらる、御所にてゝいかゝ、□御（勝仁親王）かたの御ひさしにしこう、御ひやうふのうちにて御きゝあり、十日、いちこんのたんきありて御方へなる、略○下十四日、一こんのたんきあり、略○下

〔實隆公記〕二月十四日、癸卯、霽、略○中午時參内、今日當番也、一勤厚首座、坂東學問老僧也、於親王御方、毛詩講尺、仍令聽聞、自漢廣至甘棠、略○下

三條西實隆聽聞ス坂東學問老僧漢廣ヨリ甘棠ニ至ル

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月十九日、一こんのたむきあり、略○下

廿六日、

物ヲ賜フ

一南せう院（取龍）（頭書）よりおり三かう・二かう、一こんにつかはさるゝ、」

三月六日、一こんのたむきあり、略○下

十一日、一こんのたんきあり、略○下

十六日、一こんのたむきあり、

五月四日、略○中一こんのたんきあり、略○中一こんに御かたひら二たふ、略○下

六日、一こんのたむきあり、略○下

帷子ヲ賜ノ

〔實隆公記〕五月十一日、戊辰、晴、午後參親王御方、直垂、今日毛詩講談、一勤中之、第五卷也、聽聞之後退出、一勤遲參之程、某局二番有興、

第五卷

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　五月卅日、雨ふる（おなし）、いちこんのたんき、略○下

六月十六日、略○中一こんのたんきあり、略○下

〔實隆公記〕六月十六日、癸卯、天晴、入夜雨降、今日當番、午時參内、毛詩講尺第七終、聽聞、略○下

第七卷

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　六月廿一日、一こんの御たんき、

〔實隆公記〕六月廿一日、戊申、天晴、○中略毛詩第八講尺也、仍參親王御方聽聞、及晩陰歸宅、○下略

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　六月廿四日、一こんのたんき、廿六日さしあひとてけふあり、○下略

七月二日、○中略一こんたむきあり、○下略けふもふる、神なる、

八日、○中略一こんのたんきあり、

十二日、○中略一こんのたむきあり、

十八日、○中略一こんのたんきあり、

廿三日、○中略一こんのたんきあり、○下略夕たちして神なる、

廿六日、○中略一こんのたむきあり、

八月二日、○中略一こんのたむきあり、○下略

十一日、○中略一こんのたむきあり、

九月六日、○中略一こんのたむきあり、○下略

十一日、雨ふる、一こんのたむきあり、

十八日、一こんのたんきあり、○下略

廿三日、○中略一こんのたむきあり、

廿六日、○中略一こんのたんきあり、○下略よる雨ふる、

十月十一日、○中略一こんのたんきあり、

十九日、一こんのたむきあり、

廿一日、一こんのたんきあり、○下略

十一月三日、○中略一こんのたむきあり、

十二月六日、一こんのたむきあり、

十一日、もうしのたむき、けふまてする〳〵とハつる、一こんに御ふせに御ほん・かうはこ、宮の御かたよりたふんなり、しうちやく申、○中略一こんに御たる一か・二色そひてつかはさるゝ、かさね〳〵のしうちやくのよし申、

五日、甲午、參議高辻長直ヲシテ、式部大輔ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕四十四　參議從三位菅長直（高辻）、四十九、二月五日、兼式部大輔、

〔宣胤卿記〕二月十七日、丙午、快晴、今日章長（高辻）・爲學簡策（五條）（マヽ）、○章長・爲學獻策ノコト、二月十七日ノ條ニ見ユ、式部大講了勝親王一勤ニ布施ヲ賜フ

輔、長直卿、去五日任此官、在數（唐橋）・和長（東坊城）等同參役云々、○下略

〔實隆公記〕　二月十一日、庚子、天晴、晚頭雨降、入夜微雪降、寒嵐甚、○中略　長直卿來、來十六日兩秀才、章長・可遂爲學、獻策也、仍此卿補李部、○下略

高辻章長五條爲學獻策ノ爲メ兼任

伊豫守護河野通宣、二神通範ヲシテ、同家眞ノ遺跡及ビ所從ヲ相續セシメ、且ツ其所領等ヲ安堵セシム、

〔二神文書〕　○伊豫二神種康氏所藏本

二神豐前守（家眞）一跡諸從之事、隼人佐（通範）相續不可有相違、同所領等之事、任當知行之旨、可令領掌之狀如件、

長享三年二月五日　　河野通宣

七月三日　　刑部太輔

〃　〃　〃

二神藤左衛門尉殿　○二神團四郎氏所藏本二神文書ニモ同一ノ案文アリ、

六日、乙未、諒闇ニ依リ、興福寺薪猿樂ヲ停ム、

〔大乘院寺社雜事記〕　百十八　正月十五日、

一薪猿樂事、就諒闇　○嘉樂門院崩御ノコト、長享二年四月二十八日ノ條ニ見ユ、有無如何、自古市方（澄胤）以室尋申、於寺家者不可有之、後花薗院（園下同ジ）之御時事ハ、於室町殿陣中崩御、每事無正體、御裝束以下儀、一向諒

古市澄胤薪猿樂ノ有無ヲ尋尊ニ問フ

闇之儀一天下不存之、又自何方も仰方無之、旁合戰中之間、不可成其例、但猶以可存故實之處、故筒井律師（順永）事、自相語方、學侶而薪猿樂仰付之、○文明三年二月八日ノ條參看、不可然旨、蒙其沙汰了、其以後筒井家不吉事共連續、於于今者、及數年逐電、彼家ニ如此例無之、思案之處、旁以無之者可然事也、於寺家儀者、深不可有之旨存之、押而始行事ハ不及力事歟之由、念比ニ仰付之了、此趣可申聞云々、去年さへ御出陣ニ可故實旨仰き、於當年者、旁以不可有之事也、

廿六日、

一薪猿樂事、諒闇之間、必定〳〵不可有之之由古市申、

二月三日、

一自古市方室進之、薪猿樂事、六方申先例之由申、何時例哉之由、返事仕處、後花薗院御時云々、其時儀ハ、更以不可成例之由、其餘例今日可承之由申處、文明十二年長者御隱之時在之之由申、如何旨尋給之間、文明十二年ニハ、九月二日二條殿（政嗣）御方御隱也、仍十一月後日無之、十月五日、一條殿（教房）御方、於土佐國御隱、十二月ニ聞之、次年二月ニハ、一切指合無之間、薪勿論也、此外ニ御例諒闇儀、如何之由申、何共不覺悟旨仰

筒井順永後花園天皇ノ諒闇中薪猿樂ヲ行フ以來同家ニ不吉ノコト連續ス

了、

六日、

一今日恆例薪猿樂、依諒闇無之、如去年後日也、

十八日、小雨下、

一薪猿樂事、六方色々申、自古市以室幷中綱之顯宗專當、六方へ申遣、諒闇中事ハ不可然之間、以延引通來五月可申付云々、此條可然旨、六方返事、

五月ニ追行スベシ

〔大乘院日記目錄〕四　二月六日、薪猿樂無之、依諒闇儀也、不辨先規、六方衆等可始行之之由、雖令申之、衆中不用之、去年祭禮後日、猿樂田樂頭屋能以下、諒闇之故、無之上者、不及是非次第云々、

〔政覺大僧正記〕十七　正月十六日、乙亥、

一衆徒蜂起始之在之、薪猿樂事、諒闇中不可然處、先以今日外樣ニ西金堂方エ、爲衆中下知云々、難心得者ナリ、然上者、定而猿樂可在之歟、太以不可然事也、

二月六日、乙未、

一依諒闇、薪猿樂無之、

七日、丙申、春日祭、

〔宣胤卿記〕渡方付南曹方一條殿神主職事有之

勸學院政所下文

勸學院政所下　春日社此吉書院雜色持來、加判返之、

可早致沙汰恆例佛供神事等支

右件神事等、任先例、宜致沙汰之狀、依長者宣所仰如件、不可違失、故下、

長享三年正月五日　知院事高橋續職在判

別當左少辨判（中御門宣秀）

八ケ日神事

當社八ケ日御神事、復舊儀被遂其節之由、被聞食了、殊神妙之由、被仰下之旨、南曹辨（中御門宣秀）殿所候也、仍執達如件、

正月十一日　右兵衞尉秀重

謹上　春日兩惣官御中

就春日祭之事、社家申狀、則令披露候畢、初支干延引不可然候之間、上卿已下既被相催（中山宣親）

上卿以下窮困ニ依リ故障ヲ申ス　出車ヲ獻ズルヲ人ナキニ依リ内侍參向セズ

候之處、各窮迫(廣橋)故障之間、堅御問答之最中候、次内侍參向儀、當時輙無可獻出車之仁候間、先如近年爲不參遂行候者、可爲神妙候、凡不及社家鬱訴、任先規雖可勤儀式、亂來諸家零落過法候條、更非御沙汰之懈怠候、此等趣可然之樣、且可令下知給之由、内々被仰下候也、恐々謹言、

正月廿四日　　守光(廣橋)

左少辨殿

御狀之趣、被聞食了、仍祭禮奉行御狀如此候、可被得其意之由候也、恐々謹言、

正月廿五日　　秀重

不及奥表書等也、

當社祭禮事、初支干必定之由、如此被仰下之旨、左少辨殿所候也、仍執達如件、

正月廿日　　右兵衛尉秀重

謹上　春日兩惣官御中

奉行廣橋守光

〔宣胤卿記〕正月六日、乙丑、晴、略○中院雜色來、可下南都吉書持來、申可加署之由、宣秀加判返之、不載官、可載之由申之間書之、○コノ後ニ前掲勸學院政所下文ヲ記ス、宣胤卿記所載ノモノト同文ナルヲ以テ略ス、

十九日、戊寅、晴、略○中春日師家興有狀、送神供物一具、返事靑侍奉書也、略○下

廿四日、癸未、晴、略○中自春日社司狀到來、其狀云、春日祭必可爲初支干、誰々參向乎、内侍參向事可申沙汰云々、彼狀遣守光(廣橋)、祭奉行之故也、返事晩到來、宣秀以靑侍奉書遣社家、宣秀南曹也、○下略、前掲正月廿四日附廣橋守光書狀竝ニ正月二十五日附秀重書狀ニ同ジキヲ以テ略ス、

廿五日、甲申、晴、雨降、○中略、月次連歌御會ノコトニカル、正月二十五日ノ條ニ收ム、中山中納言宣親卿、春日祭參行事經營云々、等不參、○下略

二月二日、辛卯、晴、時々微雨、風烈々、○中略自南都社司狀到來、春日祭式日必可被行之由申之、○下略

三日、壬辰、晴陰不定、○中略自拾遺黃門(三條西實隆)回覽折帋到來、加奉字返遣了、注左、

内々和漢御會、可爲來六日之由候也、○内々和漢聯句御會ノコト、正月十七日ノ條ニ收ム、

實隆

二月三日

葉室殿(光忠)

○中略

延德元年二月七日

大藏卿殿（經茂）七日春日祭俊名（坊城）朝臣參向、
勸修寺殿纏頭之、可得御意候、

五日、甲午、陰、微雨、○中略藏人神祇少副卜部兼致來、大府卿入來、明日春日祭、俊名朝臣參向、裝束以下少々借遣了、

七日、丙申、雨降、今日春日祭也、早旦退朝、浴湯、著衣冠修中臣祓、致遙拜、兩段之間又讀中臣祓、法樂也、祭奉行、藏人右衞門權佐藤原守光也、上卿中山中納言、宣親卿、雖固辭申、堅御問答云々、辨左中辨藤原俊名朝臣參向云々、使内侍等不參、如近例、中原康友、安倍盛俊、六位外記史可尋記、後日大藏卿被語云、一二獻辨不召立、三獻之時召辨授盃云々、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月七日、雨ふる、○中略かすかまつり、ふ行もり光、上卿中山、辨とし名、さむしやうる、○下略

八日、上卿夕かた申さるゝ、まつりする〳〵とはてゝ、さんかうしゆ下かうと申、○中略まつりりやうあんゆへ、御心御神事のふん、こそにおなし、

〔後法興院政家記〕二月七日、丙申、時々雨下、今日春日祭也、上卿中山中納言・辨俊名朝臣參向云々、余憚之間不及神事也、

〔實隆公記〕二月二日、辛卯、天顏快晴、○中略帥卿（葉室教忠）・日野黃門（町廣光）等閑談有興、

上卿中山宣親
辨坊城俊名

散狀

一○中略春日社事、元來南曹辨計也、傳奏近來事也、
已上日野黃門談、○下略

三日、丙辰（主）、霽、入夜雪降、及曉雨降、○中略抑今朝中山中納言來、春日祭來七日可參行云々、一昨日次第等借遣之、○中略春日祭舁御棚之時、懸裾之條善說之由、山槐記分明也云々、爲後鑒記之、○下略

六日、乙未、陰、及晚雨降、入夜甚、今日内々和漢御會也、○内々和漢御會ノコト、正月十七日ノ條ニ見ユ、仍參内、○中略經茂卿春日祭俊名朝臣參行之間纏頭、仍不參、□○中略御會及夜景、凌雨退出、明朝各可賜御小漬、不令退出可祇候哉由、勾當雖被命、明日春日祭也、小念誦等懇志之間、申其趣、退出了、○下略

七日、丙申、雨降、○中略今日春日祭也、上卿、中山中納言、辨、左中辨俊名朝臣也、宣親卿昨日借請笏之間、借遣了、今日可潔齋之處、室家月事中也、可移別屋之條、有其煩之間、只行水、本地四所之念誦計也、○下略

〔大乘院日記目錄〕四　二月七日、春日祭、上卿、中山中納言、辨、小川坊城、

〔大乘院寺社雜事記〕百十八　二月八日、

一夜前春日祭、上卿、中山權中納言、辨、小川坊城、大藏卿同道云々、無光臨、不審々々、

〔政覺大僧正記〕十七　二月八日、丁酉、

一昨夜春日祭在之、上卿、中山、辨、少(水)河坊城云々、

〔春日祭歷名部類〕延德元年二月七日、丙申、　祭

上卿、權中納言宣親、辨、左中俊名朝臣、奉行、藏人右衞門佐守光、

延臣ニ小漬ヲ賜フ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月七日、雨ふる、おとこたちに御こつけたふ、しうちやく申さるゝ、○略下

〔親長卿記〕二月五日、晴、○略中今日雖有召仰、他行不參內、歸宅之後申入、明後日可祗候云々、

七日、晴、早旦參內、被下朝食、祗候人々、源大納言(庭田雅行)・予・權中納言(正親町公兼)・右衞門督(四辻季經)・新中納言(甘露寺)元長、・民部卿(白川忠富)・前源宰相(綱小路俊量)・山科宰相(言國)・以量(薄)・重經(庭田)等朝臣・賢房(篤里小路)・爲學(五條)等也、○略下

〔實隆公記〕二月六日、乙未、陰、及晚雨降、入夜甚、今日內々和漢御會也、○內々和漢御會ノコト、正月十七日ノ條ニ見ユ、仍參內、○略中御會及夜景、凌雨退出、明朝各可賜御小漬、不令退出可祗候哉

祗候ノ人々

長橋局ヘ行幸

五月七日黑戸

六月二十四日

二十日ナルヲ宮女忘却ス

十一月二日

十二月十五日

申次甘露寺親長

由、勾當雖被命、明日春日祭也、小念誦等懇志之間、申其趣、退出了、○略下

九日、戊戌、御方違行幸、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月九日、雨ふる、○略中別てんになかゝしへなる、こん御かゝらけの物ともにて八こんゟ、はんしゆのほか源大納言(庭田雅行)・やふなとしこう、十日、○略中なかゝしよりよへのき□き物ともゟ、

○コノ後、御方違行幸ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　五月七日、○略中こよひ別てんにくろとへなりて三こんゟ、

六月廿四日、○略中廿日のへち殿をみな〳〵わすれまいりてなしまいらせぬによりて、日をとりなをさせらるゝ、こよひくろとへなる、

十一月二日、○略中別てんにくろとへなる、御さか月いつものとし、

十二月十五日、別てんになかゝしへなる、御さかつき五こんゟ、

山城安養寺ニ奉加アラセラル、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月九日、雨ふる、(親長)かんろし申つきにて、あんやう寺の御

近衛政家同尚通モ聽聞ス

ほうかいたさるゝ、しやうとしゆなり、○下略

〔參考〕

〔山城名勝志〕四洛陽部三　安養寺在四條坊門南京極、圓福寺南隣也、額後深草院宸翰云、佛壇莊嚴異于他、寺記云、始號華臺院、源信僧都、於和州葛城郡當麻鄉所草創也、安養尼繼住于此、故改安養寺、本尊彌陀、春日作云云、天永年中、沙門隆暹、移寺於洛陽之樋口、後又遷四條西洞院、永祿五年下知狀云、四條西洞院安養寺、後深草院御宇、證佛上人來住、闡揚淨教、故謂東山義亙（亦名宮辻子義）、一派之古本寺、後深草院・伏見院勅爲官寺、曾後深草院賜宸翰額、裏書云、建長六年九月十九日、

十一日、庚子、義政、山城大報恩寺千本釋迦堂、ニ詣リ、同寺ノ遺教經講談ヲ聽聞ス、

〔蔭凉軒日錄〕○尊經閣本　二月十一日、○中略　此日、東山相公（義政）、遺教經御聽聞、御成千本釋迦堂（大報恩寺）、有御一獻、及半夜還御云々、

〔後法興院政家記〕二月十一日、庚子、晴陰、時々雨雪、風吹、今日東山殿、被聽聞遺教經云々、

十二日、辛丑、晴陰、風吹、令聽聞遺教經、左大將（近衛尚通）同之、女中衆又有聽聞、

〔實隆公記〕二月十一日、庚子、天晴、晚頭雨降、入夜微雪降、寒嵐甚、○中略今日菩提寺遺教經、東山殿御聽聞云々、

延臣等聽聞ス

遺教經衆近江鉤ニ赴ク

〔宣胤卿記〕二月十二日、辛丑、快晴、○中略次相伴江南（淑馨）・遍照院・宣秀（中御門）・隆永（四條）等詣千本尺迦堂、遺教經聽聞、先詣北野社、遲々間、立寄長老坊、有盃杓（酌）、日野一品（御原資槻）・冷泉前亞相（爲富）・右衛門督（四辻季經）・冷泉新中納言（爲廣）・園宰相（基富）等來、此所同相伴入聽聞所、有樂、歡喜院（爭又笙、左大將入道也、）洞院、俗名公數卿、遁世黑衣也、・右金吾（四辻季經）・園相公、琵琶、地下、景益（山井）笛、・同子童形、笛、事終、各同道歸宅、昨日東山殿御聽聞、及深更有一獻云々、○下略

十四日、癸卯、晴、○中略一條前亞相（清水谷實久）被來、千本遺教經衆、今日參江州云々、將軍御所、○下略

〔親長卿記〕二月八日、晴、參遺教經聽聞、

〔北野社家引付〕○東京教育大學文學部日本史研究室所藏　二月八日、天氣快晴、自松田對州（歡秀）、東山殿樣來

十一日釋迦堂遺教經可有御成候、然者近所之儀候間、御樽・御折進上仕候者可然由候間、卽以使者事樣相尋之處、御折自御所々々樣可參候、當坊より進上仕候者、御折十合・御樽五荷可然由意見候間、卽信濃方へ申付者也、

一今日柴（芝）藥師（大興寺）へ參詣、以其次遺教經聽聞也、

九日、天氣雨降也、

一信濃方へ御折料之三貫文、以江村遣之、
一覺藏來而申樣、就東山殿樣釋迦堂へ御成、經堂御簾疊可借遣由、飯尾大和守(元運)成奉書云々、仍如此時者、每度公文承仕相副取出之由申間、其分加下知也、御棧敷疊簾被改時者、悉當坊取之先規也、
十日、天氣曇、時々雨少降也、
一遺教經捧物猶葉(檢カ)方へ任例遣之、使江村也、
進納申御捧物事
杉原　一束
鳥目　百疋
右所進納申狀如件、
長享三年二月十日　禪豫
猶葉(檢カ)殿
明日十一日御誦經、其外卷數以下、御陣へ以中澤進之也、
一自松田對州、明日大報恩寺就御成、御茶湯雜具、可借遣由、折帋在之、○義政、東福寺ヨリ、同寺ノ茶湯ノ洗米器等ヲ徵スルコト、本月一日ノ條ニ見ユ、併案スベシ當坊不所持之由返事仕也、

十一日、天氣霽降也、今日大報恩寺御成也、近所之間致祗候、御折十合・柳五荷進上仕也、仍以伊勢右京亮(貞遠)申入處、御伴衆所可致祗候由被仰出、忝次第也、卽著衣袈裟面々致祗候也、御伴衆者大館刑部大輔(政重)・細河治部少輔(政誠)・一色兵部少輔(政具)・伊勢因幡守(貞誠)、同朋者隆阿也、法會結願而卽後戸へ各參上、先通召出在之、但於陰也、御酌者寶鏡寺殿(日山理永尼)御同宿上臈御方也、其後、於御前、女中樣其外御所々々樣、御座所ニ參上仕也、御酌者慈慶院殿也、禪豫幼少之時より、被懸御目處、令致疎略由、直公方樣へ御申、其時上意、直色々御詞在之、於近代儀者、播面目、誠以忝次第也、卽御太刀一腰金・千疋進上、申次、伊勢因州也、還御迄致祗候、時宜難盡短筆者也、大御酒也、殊御機嫌近比也、御所樣御車也、御所々々者御輿也、御酒之㕝中、管弦等種々有御座也、
十三日、雨降也、慈慶院へ參御禮、仍御樽二荷・壺物五調參也、有御酒、色々御物語在之、以其次近藤方へ罷出、酒在之、
一自釋迦堂、御座疊被返也、
十四日、天氣快晴、○中略
一於釋迦堂、御伴衆被取合之間、方々へ參禮也、

三月七日、雨降也、○中略
一今日釋迦堂へ進上御折帋錢千疋納畢、但五百疋事者、先密乘院借用而軈可返辨由被申者也、
十六日、雨降也、但自巳刻快晴也、○中略
一大報恩寺御成之時致進上候御折帋錢、今日自長老坊請取到來、

時正

十五日、甲辰、涅槃會、
〔實隆公記〕二月十五日、甲辰、午後雨降、風烈、今日時正也、佛涅槃也、仍持齋念佛、涅槃捧物、奈良油煙一廷、内々進上之了、○下略
十六日、乙巳、雨降、○中略自勾當局、大箱・雀等送賜、昨夜捧物云々、畏入之由申了、○下略

三條西實隆奈良油煙ヲ獻ズ

白川忠富捧物ヲ進ム

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月十三日、雨ふる、御ほうもつみん部卿（白川忠富）より〻、○下略
十四日、○中略御ほうもつともまいりてふしみの御所（寺カ）へ〻、この御所の御ちふつたうへ（般舟三昧院カ）もおなしく〻、
雨ふる、十五日、く御に御とき御さた□くし□□あり、宮の御（勝仁親王）かたもなる、
○甘露寺親長、涅槃會ノ捧物ヲ安禪寺惠春尼（芳苑惠春尼）ニ進ムルコト、便宜左ニ合敍ス、

甘露寺親長安禪寺ノ涅槃像ヲ拜シ惠春尼ニ涅槃會捧物ヲ進ム

〔親長卿記〕二月十五日、陰、雨下、○中略參安禪寺（芳苑惠春尼）殿、拜涅槃像、進上捧物了、
十六日、乙巳、御貝合アリ、
〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月十六日（けふもふる）、○中略小御所にて御さか月〻、御かひあそ〻す、○下略
○三月五日御貝合ノコト、便宜左ニ合敍ス、
〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　三月五日、○中略小御所にて御かいあそはす、
十七日、丙午、文章得業生五條爲學・高辻章長獻策、
〔拾芥記〕上　長享二年　予十六歳
一申課試宣旨事
十二月十七日、申課試宣旨、以强紙一枚書之、以一枚爲裏紙、次回狀杉原一枚書之、以一枚爲裏紙、以一枚爲禮紙、而奥卷添欵狀封之、立文也、遣職事、萬里小路（賢房）、上卿、勸修寺大納言（教秀）也、上卿雖被宣下、於覆奏之儀、近代者、自貞治比無沙汰之由、東坊（和長）申了、
延德元年二月十六日　十七日

延德元年二月十七日

師富(中原)朝臣、不尋出舊記之由申候間、被續於別紙之間、被書改被宣下之云々、勅許之間、廿三日也、記左、

請特蒙天恩、因准先例、令課試文章得業生正六位上菅原朝臣爲學(正脫)狀

右件爲學者、文明十六年、給穀倉院學問料、長享元年、補文章得業生、積年之勞稍久、稽古之力有餘、爰爲學、口無倦詩、手不釋卷、志摩九霄、儒林據秀、學通六合、國器應時、學被拔才、尤堪推薦、望請鴻慈、准先例、被下宣旨、令件爲學、遂課試矣、仍勒支狀、謹請處分、

長享二年十二月十七日

從五位上行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣和長(東坊城)朝臣在數

正五位下行少納言兼侍從大內記文章博士式部少輔菅原(唐橋)

正二位行權大納言藤原朝臣教秀(勸修寺)宣、奉勅依請者、

同年同月廿三日　掃部頭兼大外記造酒正中原朝臣師富奉

狀云、

課試欵狀獻之候、早速預奏達者、萬悅候也、恐惶謹言、

十二月十七日　爲學

謹上　右少辨(富小路賢房)殿

一申問頭宣旨事、與欵狀調樣同、禮紙、是ヲ懸紙トモ云、

長享三　予十七歲

正月十一日、申問頭宣旨、上卿、勸修寺大納言、職事、萬里小路右少辨、

十四日勅許、廿八日自師富朝臣、課試欵狀幷問頭宣旨到來、

文章得業生正六位上菅原朝臣爲學誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩、因准先例、被下宣旨、以從五位上行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣和長爲問頭奉策試狀

右爲學、謹檢案內、省官或故障、或同曹之時、尋其知躅、爲問頭者例也、推其次第、今在此人、望請、被下宣旨、以件和長、將爲策試之問頭矣、爲學誠恐謹言、

長享三年正月十一日　文章得業生正六位上菅原朝臣爲學

御墨ヲ申出ス

禮籍ヲ問頭ニ進ム

延德元年二月十七日

正二位行權大納言藤原朝臣教秀宣、奉勅依請者、

掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富奉

同年同月十四日

狀云、

問頭欵狀獻之候、早速預御申沙汰者、高悅候也、恐惶謹言、

正月十八日　　爲學

謹上　右少辨殿

二月十四日、今日以吉日内裏へ御墨申之、被下之、對策文二條書之、古來申出御墨例也、以宿紙書之、

一禮籍事

禮文事也、禮籍以一枚書之、内狀ハ以一枚書之、以一枚爲裏紙、禮紙追啓桃林一頭・麻根十帖殊更獻之候ト書之、奥ニ禮籍ヲ卷添也、次立文ー、和長返事、認樣同前、

内狀云、

禮籍令進覽候、尤雖可持參、今日之儀取亂候、似忘禮候歟、恐惶謹言、

二月十六日　　爲學

（東坊城和長）少納言殿

郡事屋申文

禮籍

文章得業生正六位上菅原朝臣爲學

長享三年二月十六日

禮帋返事

追而まいらせ候、桃林一頭・楮王十帖令祝著候、

御禮籍送給候畢、今日殊可早參候也、恐々謹言、

二月十六日　　和長

秀才殿

一郡事屋申文以一枚書之、强帋也、

文章得業生正六位上菅原朝臣爲學誠惶誠恐謹言

請特蒙輔宣於郡事屋奉試狀

右爲學、謹撿案内、省官不具之時、於件屋被行課試者是例也、望請、輔宣於件屋、被行奉試、將遂揚歷之業矣、爲學誠惶誠恐謹言、

延德元年二月十七日

長享三年二月日　　文章得業生正六位上菅原朝臣爲學

一題之事輔被出云々、以一枚書之、强紙也、

策秀才文二條

學　學士

美　先生

獻策事

一二月十六日(七)獻策、長直卿・同兩秀才(章長予、於東坊城亭著裝束、如本掛也、)三獻酌畢、高辻乘毛車、東坊城・兩秀才、乘八葉毛車、下簾懸之、御簾捲前下後事不審云々、前ヲ自捲後ヲ僮僕捲云說有之、東坊城乘右、(東以右爲上、)前秀才乘左、予後乘也、御簾捲前下後事不審云々、尊者乘則下前後、賤者乘時ハ又下前後云々、下蔦下前ト云ュヘハ、捲前則遠見ス、下前則恐前毛車之公卿也、公卿車置榻、殿上人車不置榻、高辻侍一人、如木一人、雜色六人、笠持一人、供之侍之中間、衣繪直垂也、兩秀才皆雜色二人ツヽ供之、同傘持一人ツヽ、供之、先參文章院、三獻撤之時皆退出、次參西廳、其儀詳次第也、

予問頭、始者雖唐橋、依有意趣、東坊爲問頭、高辻爲輔、判者、唐橋・東坊也、文章院義クリヤメ存之、西廳借屋ハ自東所建之、小屋者御藏建之、藥師寺備後(元長)守警固也、

文章院爲學ノ問頭始ハ唐橋在數故アリテ東坊城和長ニ改ム判者

見物ノ道俗超過

〔和長卿記〕　○柳原家記錄九十九所收　長享愚記(菅章長・同爲學等獻策、)

從五位上行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣和長(三十歲、)判

長享三年二月十七日、丙午、晴、今日前秀才章長・秀才爲學兩人獻策、式部大輔長直(高辻卿、)・兩試衆等、自私第出門、於門外各乘車、輔、檳榔、予、(小八葉、)兩試衆後乘、各先向文章院、於二條大宮邊下車、大內記(在數朝臣、)於彼院相會、卽次第拜、二拜、畢著臺盤座、(東上面近代例也、本儀廿一拜也、略之時二拜也、郡事屋之儀依可遲々也、菅相公(高辻長直)任大卿、在數朝臣・予翰林已後不參、試衆等秀才以後初度、仍各參拜、儒官經曆(歷)度、每度可參之故實也、)於此所者三獻、每度丁寧下箸例也、故一獻之體、如拜賀等、厨妻調羹味也、今度道俗見物迢過之間、依見苦、皆饗膳之外不取箸、不可爲巨難、在數朝臣・予兩人(猶存故實、)於勸盃者、一盃傾之畢、撤畢、各起座、(下蔦自爲學退座、)各乘車、次向官廳、於郁芳門下車、大炊御門大宮、輔・門(間)頭等、相共入東門、(各持裾袙笏、)兩試衆向南門、先見郡事屋床子以下之構、以外相違、仍召省掌等、令改直之、次於南壇下在數朝臣進退見物之、無殊事、次予向南著靴下裾(雜色男令直之、)登壇、北行臨當間、聊窺大卿方、請益大卿、目之後入、(先左足、)立床子前、揖而著繖置裾、(床子南端方繖置之、)正笏、次輔召典、召試衆之文書、則向南門、取之持參、次輔見文書、後召典、

召試衆、秀才爲學揖著床子、次輔自懷中取出題、納筥覽神、典覽畢、置予前床子、典卽退去、予寄掛笏於前床子、（典退近床子時分置笏也、）次右手題於筥中之南方江寄、（須付筥底寄之、）以同手開端方、以左手奥江披之、（付筥底披之、）見畢、自奥卷之、（見之間、左右手不放之、）以右手置筥中、中央取笏、目典、々束之、時取渡笏於左手、以右手、自懷中取出問入筥、目典、々置大卿前、（此事予違失也、不目典已前、先取出問入筥、後取笏目典、可進輔也、）（委見本次第、）輔披見之、（此間彼召留典、）覽神、覽畢、典召省掌授試衆、々々取之入小屋、次予起床子、揖右回而出、經本路、於南壇下著淺履、判座結構之間、各佇立、次判儀、大卿著座、（今度後不立屏風之間、自後被著、）次判儒著座、（在數朝臣著第二間、座向輔、）次予著座、（著第三間疊、）揖脫沓（先左足、）坐、（先突左膝退右、）揖直足、繕置裾、次居饗、大卿六本立、（判）列儒三本立、次居盃、（小土器三重居折敷置之、）先置笏於右膝下、取一之盃飲之、次二獻、先立箸於饗、（以右手取箸、副左手取直之、箸ノ末方於持テ饗指ト小指トニテ饗ノ頂ヲ少推付テ箸ヲ指入ル也、只不立者也、）取盃飲之、次三獻、先拔箸、如元置之、取盃飲之、（雖三獻無殊事、只一度ニ盃三飲之也、）飲畢、皆撤之、次典置文櫃於大卿之前、（典解結取蓋退、）大卿撿知策文、（文一通ッヽ、聊披見之由計也、本儀者、臺盤撤畢後、判儒各先起座、此間輔披見策文、又令敷講師座、此等事畢後、更判儒復座也、雖然、不及起座、撿知之間猶著座、此事予申合上首人如此、不可爲巨難、講師座既兼敷畢、）次典置策文於神座前机、（乍櫃、）次輔向講師人目、在數朝臣受目揖起座、（先以左手取在後沓、自座下方置疊前、）著沓還向本座、揖進座前、揖脫沓著疊、次典自神前取下筥、置講師前、典則勤講師、（勤カ）（在講師右方、向文於神座、自端披之卷之、）二通講畢、復座、向本座揖、脫沓如元居、直揖直足、後置沓於

後、次典置文於輔前、納櫃、大卿一通ッヽ、披見之、令典置判儒前、在數朝臣、取文一通、見畢後卷之、下予、（以左手自左膝下、付疊指出之、）予置笏於右膝下、聊向依取之、（強不依、向其方、）聊自端隨見卷之、至奥見畢、如元卷之、置座前、（可見今一通用也、）又一通如元下之、予又取之如前見之、二通一度、自右膝下指出之、（付疊指出之、）彼朝臣取二通入筥、目典、々取之置輔前、（輔不及披見、）次予目典召硯、則置予前、予暫待輔宣、無其由之間、久非可待之、予書評定文、（此事如何、必大卿可書評判文之由可被仰歟、仍相待上宣畢、）自懷中取出評定文、（兼書儲之懷中之、）置硯傍、（硯居柳筥、彼文柳筥與膝之間横置之、）以右袍袖口墨與大指卷之磨之、（不動身、手計動之、乃文字磨之、本儀者有其磨數、然就早速廿磨計也、）置墨執筆染之、試先置筆、（聊自柳筥指出置之、）取笏申大卿云、評定文可爲當日分歟、可爲他日分歟、（此事予計會、本儀者獻策之後、撰吉日可行此事也、近代出仕大儀之間、當日付行也、然於日者、每々用他日也、但又用當日例兩端也、）仍受上宣、大卿云、爲當日云々、予小目、置笏取文披之、（以右手奥江卷之、）至年月所、移文於左手、以右手染筆、十七日ト付之、（於其付所文ヲ奥方ヘ折懸テ、以左大指押上、以小指與醫指端ノ卷タル方ヲ校之、小指在上、）次又置筆奥江卷之、至署所又染筆、々々之後、先向上首人、聊謁而後、書名字二字、（位署兼書儲之、）文のあつかい如前、次置筆卷之、遣上首、自右膝下、付疊指出之、典取硯置彼前、次予取笏、彼朝臣進退、大略同予、加署以典進輔、々又加署下典、々取之、加入策文之筥持退、次予退右足揖起座、著沓揖左廻退、各乘車、

長享三年二月日、今度獻策、予問頭與判儒相勤之、仍如此預之畢、但今度之儀、輔幷問頭・試衆・判儒等之進退、咸予守古、次目次第之旨、今案相兼而以計會訖、定不叶舊規者歟、次第又分四作之輔幷試衆授之、問頭・判儒分予持之、呵々、

菅判（朱書）「和長卿」

判儒之時、取履置座前事、尤不審之進退也、不載舊次第之間、先例無如此例者、向後不可守此義、顯長（西高辻）入道、每事不守舊規、自骨之作法多端耳矣、

〔御湯殿上日記〕（○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收）　二月十七日、○中略　ためさね・のりなかけんしやくつとめ申、きちやう所にていつれへも御たいめんあり、ためさねにゝ御さか月すゑにてたふ、○下略

〔宣胤卿記〕　二月五日、甲午、陰、微雨、新宰相長直卿（タヽ）卿、來、菅原章長・同爲學（サヲ）長直卿子故爲親子也、亂來十日可遂業、裝束以下、可借與云々、所在物令領狀了、○下略

九日、戊戌、雨下　新宰相狀到來、明日儀（章長・爲學遂業事、）延引、可爲來十六日云々、

十二日、辛丑、快晴、新宰相來、々十六日裝束借用事也、○下略

十四日、癸卯、晴、○中略　來十六日用裝束十四種、今日借渡高辻使者、

爲學ニ盃ヲ賜フ

長直裝束ヲ中御門宣胤ニ借ル

雨ニ依リテ延引ス

在數長直裝束ヲ三條西實隆ニ借ル

章長ノ問頭ハ在數

十六日、乙巳、晴陰不定、時々微雨、○中略　今日菅原章長・同爲學、可遂業之處、依雨延引云々、可爲明日云々、

十七日、丙午、快晴、今日章長・爲學簡策、式部大輔長直卿、去五日任此官・在數・和長等、同參役云々、○下略

十八日、丁未、朝間微雨、早屬晴、○中略　自式部大輔裝束類十四色返之、○下略

十九日、戊申、晴、○中略　李部入來、被謝種々借用事、○下略（十七日）

〔實隆公記〕　二月六日、乙未、陰、及晚雨降、入夜甚、○中略、（内々月次和漢聯句御會ノコトニカヽル、正月十七日ノ條ニ收ム、）□（裏）

秀才來十日可遂獻策、文章等無餘日、計會之間不參、○下略

十一日、庚子、天晴、晚頭雨降、入夜微雪降、寒嵐甚、○中略　長直卿來、來十六日兩秀才爲學（章長）可遂獻策也、仍此卿補李部、件日可慶八座慶云々、毛車下簾可借請之由也、不所持之由命之、數刻雜談、○下略

十五日、甲辰、午後雨降風烈、○中略　紺地平緒、在數朝臣借用之間遣之、表袴沙汰立事、長直卿所望間、今日沙汰遣之、

十六日、乙巳、雨降、秀才等獻策事、今日延引歟、可尋、○下略

十七日、丙午、晴、今日獻策、無爲無事云々、章長問頭在數朝臣、爲學問頭和長云々、

題等可尋、〇下略

〇五條爲學ヲ文章得業生トナスコト、長享元年十一月二十一日ノ條ニ見ユ、ナホ、章長・爲學敍爵ノコト、竝ニ章長ヲ少納言ニ、爲學ヲ侍從ニ任ズルコト、便宜左ニ合敍ス、

章長ヲ少納言ニ任ズ

敍爵

〔歷名土代〕 從五位下菅章長　同(長享)三六十九、同四月廿五少納言、

〔宣胤卿記〕 三月十九日、丁丑、陰、章長(廿一歳)太刀持來、爵勅許口宣案所望云々、此事勸修寺大納言奉書先刻到來、但宣秀自今朝參詣石山、明日可還向、其時可申合之由返答了、〇下略

廿一日、己卯、晴、章長榮爵口宣案幷太刀、以使者遣之、〇下略

〔拾芥記〕 上　長享三　予十七歳

六月廿四日、申敍爵、

口宣案

上卿勸修寺大納言

長享三年六月廿六日　宣旨

菅原爲學

宜敍從五位下、

爲學敍爵

侍從ニ任ズ

七月三日、申侍從、

藏人右少辨藤原(廣橋)守光奉

内狀云、

申侍從事、

爲學侍從事、勅許之樣、預御奏達候者、可畏入候、爲學誠恐謹言、

六月三日　爲學上

勸修寺(教秀)殿

口宣案

長享三年七月三日　宣旨

從五位下菅原爲學

宜任侍從、

藏人右少辨藤原守光奉

〔實隆公記〕 六月廿六日、癸丑、天晴、〇中略及晚□□菅原爲學敍爵事、今日勅許云々、

〔歷名土代〕 從五位下菅爲學　長享三六廿六、七月十三侍從、

勝仁親王御参内
上乗院参内
諸家ノ彼岸行事
近衛政家
中御門宣胤

御圍碁アリ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月十七日、○略中小御所にて御五あり、中山（宣親）・へんせう院□ほつけうなとめす、○略下

○五月二十七日ノ御圍碁ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　五月廿七日、○略中小御所にて御五あそはす、○略下

十八日、丁未、彼岸中日、近臣ニ御齋ヲ賜フ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月十五日、雨ふる、く御に御とき御さた、□くし□あり、宮（勝仁親王）の御かたもなる、

十八日、ひかんのちう日、御とき御さたあり、下（上乗院）かんら殿、ちこ御ともにてなる、

廿一日、けふも御とき御さたあり、

○諸家彼岸行事ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔後法興院政家記〕二月十五日、甲辰、雨下、早旦向本滿寺、令聽聞法談、次向教林坊、有朝飡、次向頂妙寺、令聽聞說法、及晚歸宅、

〔宣胤卿記〕二月十五日、甲辰、風雨終日不休、雨夜尙降、時正初日也、請僧如例、持齋、○略下

廿露寺親長
三條西實隆
浦上則宗ノ松拍子ニ返禮
拍物ノ數七十
細川成之邸松拍子

十八日、丁未、朝間微雨、早屬晴、長谷寺別課觀音經卅三卷讀誦、彼岸中日也、持齋、○略下

〔親長卿記〕二月十五、陰、雨下、今日時正初日也、云佛涅槃、○涅槃會ノコト、本月十五日ノ條ニ見ユ、云彼岸始、作善日也、持齋、終日念佛、○略下

〔實隆公記〕二月十五日、甲辰、午後雨降、風烈、今日時正也、佛涅槃也、仍持齋念佛、涅槃捧物奈良油煙一廷內々進上之了、○略下

赤松政則、美作小原ノ陣中ニ、松拍子ヲ張行ス、

〔蔭凉軒日錄〕○尊經閣本　二月廿五日、天快晴、○略中富田土佐守（結貞）來、○略中作州小原陳松拍、今月十七日有之云々、○略下

三月三日、不參、天快晴、○略中時自播州丹首（象丹）座方狀到來、○略中其外藤左以下所々狀來、一々披見之、正月十六日、自浦作陳（浦上則宗）所、企松拍、赴大將之陳（赤松政則）所、其返報二月十七日有之、書立上之、凡拍物數七十色・能七番・狂言七番云々、○略下

○細川成之邸松拍子ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔蔭凉軒日錄〕○尊經閣本　正月廿四日、不參、天晴、○略中今夕於讃州（細川成之）第有松拍、々々十番・手能五番有之由、永德（春陽景果）傳語之、

十九日、戊申、三千院堯胤法親王、御参内アラセラル、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記録甲三十所収　二月十九日、○略中（堯胤法親王）かち井殿御まいり、

○本年中、宮・尼宮・門跡・廷臣・僧侶等ノ参内ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記録甲三十所収　二月十三日、雨ふる、○略中（邦諫）ふつたい寺もうきのゝち、はしめて御れゐにしこう、

〔宣胤卿記〕二月十三日、壬寅、雨降、佛陀寺長老來臨、長病以後、今日始而參内云々、○略下

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記録甲三十所収　二月十六日、けふもふる、○略中しやうせう寺まいらるゝ、御ちやゐ、

十七日、○略中（芳苑恵春尼）あんせん寺殿はつせへ御まいりの御いとまこい、御ふた御所なる、

廿四日、○略中あんせん寺殿より、はつせ御宮け三色ゐ、○略下

三月八日、あんせん寺殿御ふた御所なる、○略下

四月六日、○略中しやうれん院の宮なる、やかてくわん御なる、（常信法親王）くわん御所も御いとまこゐに御まいりにてくもしなる、○略下

五月九日、（景蔑）らんはひさしくしこうなきとてまいらるゝ、御たいめんあり、

景蔑

佛陀寺邦諫参内ス

十三日、○略中中院の入（通秀）たうそう久しくしこうなきとてまいらるゝ、ゐ中かみをまいらるゝ、御たいめんくろとにてあり、○略下

廿六日、○略中（宗山等貴）はんせう御もうきのゝち、はしめて御まいり、小御所のくこんはてたる御ほとにて、○廷臣、酒饌ヲ獻ズルコト、二月二日ノ條ニ見ユ、こなたにて御さか月ゐ、

廿七日、○略中（就山永崇）れんき・はんせう昨日のまゝ御しこうあり、○略中（第四皇子）いまわか宮の御方なる、

八月二日、あんせん寺殿なる、○略下

八日、二（善空）そん院まいらるゝ、御たいめんあり、○略下

十七日、○略中あんせん寺殿なる、

十八日、○略中（大慈光院宮）おか殿久しくならぬとてなる、○略下

九月十八日、○略中あんせん寺との御ふた御所なる、○略下

是ヨリ先、山城鹿苑寺住持梵桂、（維馨）退院ス、義政、性致（眞境）ヲ、同寺住持ト爲ス、是日、性致、入院ス、

〔蔭涼軒日錄〕○尊經閣本　長享二年十一月廿五日、天陰、○略中自大館左衛門佐（尙氏）殿一行有之、

中院通秀田舍紙ヲ獻ズ

萬松軒等貴

聯輝軒永崇

二尊院善空

大慈光院宮

寺家トシテハ壽芳ヲ望ム

義熙既ニ性致ヲ以テ後住ト定ム

自常喜軒（春英壽芳）著之、其狀云、鹿苑寺住持之事、此已後者、可爲眞鏡（境下同ジ）和尚（雅致）分候、但寺家御修理已下事、慶雲院芳長老（春英壽芳）與眞鏡何可然候哉、内々可尋申之由被仰出候、具御返事承候て、可致披露候、恐々敬白、十一月廿三日、尚氏判、蔭凉軒（臨泉集說）侍者御中、乃返章云、就芳長老鹿苑寺住持之儀、預御尋候、致長老事、雖以前被仰出候、兎も角も可爲上意候、於寺家之成敗等者、芳長老可然仁躰候、此由可得御意候、恐々敬白、十一月廿四日、集證判、大館左衞門佐殿　御返報、乃遣之、略○下

廿六日、不參、天快晴、略○中同大館左衞門佐殿上表狀案、略○中下之、左衞門佐殿狀案、住持加判形、如是院奉行、以飯尾加賀（清房）守白之、書立之折帋幷愚遣（臨泉集說）于加賀方一行、太初（眞啓）西堂渡之、略○下

晦日、不參、天洒飛雪、略○中自捻持院、以置鹽加賀守被仰子細者、鹿苑寺後住事、自江之御所、以前以眞境長老被仰定、萬一自何方雖有望白子細、無相違樣可有御返事、先日參東山相府、四五度白之條、不可有相違之由、御返事有之、其分可得御意由有之、愚返答云、被定置眞境事、亦江之御所上意也、又可被成別人、亦江之御所可爲上意、愚意得不可入云々、乃以昌子（盛文集昌）告實常喜、々々曰、依等持寺（普徐周麟）不例如此、捻持院被仰哉、不審千萬々々、略○下

細川政元性致後住ノコトヲ集證ニ督促ス

十二月四日、不參、天快晴、略○中午後春英來云、就鹿苑寺事、自捻持院景徐方江御返事如此、一見之、則相違之子細有之、又自江之御所曇花院江被進御書之案亦同一見、則相違之儀有之、不審々々、勸盃歸、略○下

十二日、不參、天晴、略○中早旦桂公（竺英有桂）赴江之御陳、略○中晚來自江之御陳大館殿折帋到來、僧一人可進云々、返章云、桂侍者今朝參陳、定其方江可參、何等事亦可仰付云々、略○下

十三日、不參、天陰、略○中自京兆（細川政元）以香西五郎右衞門尉云、鹿苑寺後住事、眞境和尚無相違樣可預意得、返答云、已前自江之御所、以眞境和尚被定置、爲其分者可得其意、到上意相違之儀者、此方之儀、不可及是非也、依近日咳氣平臥、不能面拜云々、略○下

十四日、不參、天洒雪、夜白則天晴、略○中自江之御陳桂子歸、略○中桂子往大館左衞門佐殿、彼返章亦有之、佐殿面桂曰、爲上意被仰出鹿苑寺後住事、眞境・春英（壽芳）兩人間、孰可然乎、御返事早々可有御白云々、佐殿云、眞境可然由、可有御白乎、春英可然由、可有御白

義熙大館尚氏ヲシテ集

證ニ性致壽芳兩人ノ適否ヲ問ハシム

壽芳後住ノ競望ヲ斷念スベキ旨ヲ集證ニ告グ

政元後住競望ノコトニ就キ集證ニ質ス

乎、已前自東山殿被仰定間、東府江可被伺白、御返事可有御白乎、此三之外、不可有別義乎之由有之、自捻持院被進曇花院一行、自御前出爲愚一見、佐殿被度桂子、々々持之來、略○下

十五日、不參、天晴、略○中晩來常喜來、自捻持院被進曇花院一行、自江之御所御前、今月十一日被出之、大館佐殿被度桂子、々々一昨日持之來、常喜一覽之、愚云、緣藏主（蕭洲等緣）云、眞境者吾門徒（三秀門派）老僧也、已及恥辱條、白京兆可究尋于當軒（蔭涼軒）云々之由、有人告之、如何々々、常喜云、爲當軒之難義者、我事者、雖爲何時、可止其望云々、

十六日、不參、天洒雨、略○中往等持寺、先愚常喜在書院、鹿苑寺事相議談、勸盃、略○下

十七日、不參、天晴、略○中自京兆、以香西五郎右衛門尉、鹿苑寺再住事、自四五年前、以眞境有御定、近日別人相望由有之、就其自蔭涼出狀有之由、有其聞、事爲實哉、子細可承之由被白、内々承分者、公義無御存知之由、有其聞、如何々々、丹公曰、軒主他行、有歸院可傳其命、此方事者、兎も角も可爲上意之由被白也、略○下

廿日、天晴、略○中午後秋庭備中守（元重）來、勸盃、就鹿苑寺住持事、自京兆、頻預御使、迷惑

後住ノコトハ一ニ義熙ノ意ニ在ル旨ヲ尚氏ニ報ズ

義政集證ヲシテ性致ノ後住決定ノコトヲ速ニ義熙ニ報ゼシム

義熙性致ヲ後住ニ定メシハ文明十七年ナリ

之由話之、備中公諸事堪嗟嘆之由謂之、略○下

廿一日、不參、天晴、略○中愚遣一行於大館左衛門佐殿、狀云、就鹿苑寺後位（住）之儀、重上意之通蒙仰候、已前如申入候、兎も角も可爲上意候、以此旨可預御披露候、尤以參陳雖可申入候、此間起持病候而、起居不自由候條、以僧申入候、自然之儀者、可預御心得候、可得御意候、恐々敬白、十二月廿日、名判（臨泉集證）、大館左衛門佐殿　御陳所、命久公、略○下

廿二日、不參、天快晴、略○中午時自東府被召、熊谷使者兩度來、謁殿中、則以堀河殿被仰出子細者、鹿苑寺後住事、自最前、以致長老被定置、此度相尋鹿苑・蔭涼處、致長老相定之由、返事有之、以其分曇花院江被仰遣處、芳長老事、自我方相定之由、何者御陳之御所江白之哉、曲事也、後住事、致長老被相定之由、江之御所江早々可白之命有之、以外御逆鱗也云々、愚云、更々不存子細也、去文明十七年四月十六日、小川御所江被召參、則今御乳傳台命曰、鹿苑寺後住事、以眞境長老有御定、其分可意得之由被仰出、乃以書立賜愚、々曰、雖有御定、自東山殿、以別人被仰出如何、相公曰、然者以此旨、

可白東相公之命有之、同廿一日、謁東府、傳尊命、御意得之由有之、同廿三日、謁小川東相公、御返事白之、同年十一月五日、又小川御所江被召、佐之御乳傳台命曰、以前鹿苑寺後住事、以眞境長老雖被相定、維馨(梵桂)長老再住事望之、老體云、御授衣・御法名等勤之、再住先相定之、維馨再住後、眞境長老事、可被仰付之由、可白東相公之命有之、乃謁東府傳尊命、則相公曰、後住事眞境相定之間、別可然在所有之者、維馨事可被仰付台慮有之處、再住事有御白、御本意之由被仰出候、又以此命使佐之御乳白之、其後者不及沙汰、眞境相定處、去月廿三日、自御陳御尋子細者、鹿苑寺後住事、以前眞境長老事雖被相定、就寺家造營等之儀、芳長老事可被仰付、如何、造營等成敗、致長老與芳長老、何可然乎、具御返事可白之由有之、愚御返事仁白子細者、鹿苑寺後住事、芳長老事預御尋候以前、致長老事被仰出、雖然兎も角も可爲上意、於寺家之成敗等者、芳長老可然仁體候由、御返事白之、自餘事者、一向不存知由白之、堀語云、昨日於御前、芳長老者不勤秉拂而爲長老等之事、色々被白相公御方有之、相公曰、不勤秉拂而爲長老之事、無御覺云々、我白曰、瑞溪(周鳳)之會下、出世之僧一人亦無之、殊瑞溪十三年忌、就其佛事、芳長老出世之事

梵桂再住ヲ望ム

集證周鳳ノ會下出世ノ

御免有之云々、眞境長老鹿苑寺後住事被仰定訖、以此旨、可達江之御陳之命有之、愚白、虫氣以外起、以僧可傳台命云々、○略下

廿三日、不參、天洒雪、就鹿苑寺事、自等持寺一行來、乃返章調之遣之、又以一行、鹿苑寺後住事不審之子細、問堀河殿、々々々返章云、曇華院彼妄語之事有御白、相公曰、不可有蔭涼其義之由、有御白、只今又能白開之條、有御心得云々、眞境後住事者、來廿五日參陳之次、可白之命有之云々、○略下

廿四日、不參、天洒雪、及白晴、○略中自曇花院東山相公御書案賜之、蓋鹿苑寺後住事、以眞境御定之由、使愚御白江之御所之由有之、以在他不能御返答、及歸遣一行於慈泉庵、々々々返章有之、○略中香西五郎左衞門尉、就眞境事、爲京兆使來督之、面之、始末委曲話之、來日廿五日、參江之御陳、可傳東相公之命、然者眞境可爲理運云々、○略下

廿五日、不參、天快晴、○略中待夜白赴江之御陳、○略中、集證等、鉤ノ陣ニ到リ、義熙ニ歳末ヲ賀スルコトニカヽル、長享二年十二月二十五日ノ條ニ收ム、著道具、先往大館左衞門佐殿陳所、以面鹿苑寺後住事、自東相公可被定眞境之旨、可白命有之、可有御披露乎、佐曰、諾、乃出書立度之、參御陳、○略中愚留、以大館公白眞境事、乃披露、相公御返答曰、鹿苑寺後住事、被定置眞境之儀無餘義、雖然就寺家之造營等成

僧一人モナキ故壽芳ノ出世ヲ望ム

集證鉤ニ赴キ性致後住ノ旨ヲ義熙ニ傳フ

義熙壽芳ヲ性致ノ後住ト定ム

敗者、芳東堂可然由白仁有之、依之爲寺家可被成芳東堂乎之處、爲東相公上意、如以前被定置、以眞境、無相違可定住持之命有之、如命云々、愚白、然者后住事、以芳東堂被仰定可然乎、相公曰、諾、然者可爲其分、可得其意、愚曰、雖無上意餘義、自東山又以別人被仰出如何、相公曰、然者以内義其分愚可白東山殿、不可謂相公被仰云々、略下

廿六日、天洒雪、略中集證歸洛ノコトニカヽル、遣使者於大館公宅請狀、略中一行寄愚、略中自粟田口直謁東相府、雪已盈尺、九鼓之前也、以堀河殿被相定眞境之由白之、後住事、芳東堂被定之命傳之、兩條有御心得云々、略中退出、直往鹿苑（催明瑞智）、傳眞境・春英前後住事、傳台命、略下

廿七日、天晴、積雪盈尺、齋前以樹公傳相命於常喜、略中齋了、謁東府、略中愚謂堀河殿曰、就芳長老虛言事、爲迷惑、堅預御糺明、愚虛言若一定、可被行流罪・死罪、若別有白手者、堅御罪科可忝、此分自然時者、御白可畏入云々、就之亦御暇之事、早々御白御沙汰可畏入云々、堀云、其分以御機嫌可白云々、略中常喜來、伸鹿苑寺後住之禮、以桂子眞境事并歲暮之禮、等持寺・曇花院・捻持院・香西五郎左衞門尉方白之、略下

廿八日、不參、天晴、略中小補來、伸歲晏之賀、愚始談致長老・芳長老鹿苑寺後住相論事、略下

廿九日、不參、天晴、略中晚來眞境來、面之、話及鹿苑寺後住事、愚亦件々說破之、勸盃、略下

晦日、略中妙嚴院（東璞洪曦）茶話移尅、話及眞境之事、略下

三年正月十五日、不參、天快、〔晴脫カ〕略中晚來小補（横川景三）來、略中雜話移尅、說破鹿苑寺後住相爭之事、初中後時宜具說之、略下

二月十三日、不參、自夜半天洒小雨、略下自鹿苑寺以隆藏（虎岩景隆）主云、今日十三、退鹿苑寺移洛居、多年住山、無爲珍重云々、留隆公勸盃、隆云、來十五日、可渡寺家云々、愚返答云、如示誨、多年御住山、無爲無事、殊寺家御興隆、珍重々々、去年十月廿六日、謁東府、寺家御興隆之事、具達台聽云々、略下

十四日、不參、天晴、略中眞境東堂來云、昨晚自鹿苑寺并鹿苑院、有鹿苑寺内報云々、不面之、略下

十九日、不參、天快晴、略中眞境致和尙來云、今日鹿苑寺入院、茶話乃歸、侍衣等緣藏主云々、

廿三日、天快晴、略中齋罷、謁東府、略中鹿苑寺、維馨和尙久住持、無爲退院、以老耄之儀、

性致寺家ヲ請取ル

梵桂退院

性致集證ニ禮謝ス

年始御禮等缺之由被白、又眞境和尙、今月十九日、鹿苑寺入寺、來于當軒、致禮謝、兩條御意得之由有命、〇下略

義政維馨ニ折ヲ贈ル

廿四日、不參、天快晴、〇中略御折三合、自東府被進維馨和尙、以昌子報之、同鹿苑寺退院、依老耄年始之御禮被缺之事、懇々披露之由傳之、〇下略

集證性致ノ入寺ヲ賀ス

七月十五日、不參、天快晴、〇中略次鹿苑寺、入寺後、未伸禮、今日始賀之、住持眞境和尙出迎、雜話移尅、〇下略

二十二日、辛亥、水無瀨法樂和歌御會、

〔御歌御會短册題筌〕〇聖護院所藏

長享三年二月廿二日當座、水無瀨法樂、

〔實隆公記〕二月廿二日、辛亥、〇中略後鳥羽院法樂之儀如例年、〇下略

姉小路基綱ノ勸進ニ依リ水無瀨法樂ノ御製ヲ賜フ

○姉小路基綱ノ勸進ニ依リ、水無瀨法樂和歌ノ御製ヲ賜フコト、竝ニ冷泉爲廣、和歌ヲ勸進スルコト、便宜左ニ合敍ス

〔實隆公記〕二月十六日、乙巳、雨降、〇中略基綱(姉小路)卿法樂題、今日令進上禁裏了、

三月廿一日、己卯、天晴、今日當番也、未刻參內、於御學問所、基綱卿勸進水無瀨法樂

樂和歌ノ御製ヲ賜フ

三條西實隆執奏ス

六首御製、有被仰談之子細等、所存之旨申入了、〇下略

廿二日、庚辰、晴、〇中略水無瀨法樂御製短册、今朝被持遣之間、則遣姉小路宰相許了、

〔實隆公記長享三年春夏紙背文書〕〇三月一日・二月十五日至二十二日裏

題進覽候樣、それまての儀も聊爾之儀候、うれしく候、可然樣內々殊納て可有御進上候、納物殊不可存候、

冷泉爲廣和歌ヲ勸進ス

委細芳翰恐悅候、抑彼御製事、已可達微望候條必然候、今夕女房奉書拜見、殊勅定之趣、面目之至、去年延引、至今中々有氣味之樣候、偏御奏達所致候、彼靈廟之叡鑒も、感應合符契候歟と、萬端滿足心中候、仍御短册、去年のまゝにて、祕篋底候、只今取出、令獻上之候、早々被傳進候者、殊畏悅候、將亦昨日瓦礫、模彼金玉而甘吟味候、當年贈答之始候、可爲詠草肝要候、彼御一望成就圓滿、又無疑存候、女房奉書、可付廻返進候へとも、愚老美目外、凡無別事候、先暫預置候て可返事候、猶旁期參謝候、誠恐謹言、

（長享三年）二月十六日　基綱

（端裏ウハ書）「基綱」

〔宣胤卿記〕正月十三日、壬申、晴、〇中略

冷泉新中納言爲廣卿勸進、此題先日送之、
詠砌下栽竹　此懷帋今日以使者遣之、

和歌

實をむすふ竹を軒はにうへしより來てはむ鳥をまつもいく千世

權大納言宣胤（中御門）

中御門宣胤ノ歌

〔實隆公記長享三年春夏紙背文書〕○二月十二日至十四日裏

曼殊院良鎮和歌ヲ詠進スス

○上略　先度冷新中會始竹御詠、拜見仕候了、不存知事なから、めつらしく殊勝存候、令書候序思出され候、春の竹と候て、慥きこえ候、借古事ハさる事なから、いつしか彼序ハ才學にてやといにもしに存候、定これそ邪推にて候と存候、何事候やらんと不審候人々候つる、□例之才學候キ、比興々々、あら〳〵面談、大切事共多候や〳〵、きと異躰出頭も難叶之樣候、於于今其まてもやくたて候ハぬ進退を、案入計候、就其も閑談申候ハやと思暮念願（旦カ）計候、何とやらん申度候へとも、先閣筆候也、恐々謹言、

二月十一日（長享三年）　廣光（町）

〔言國卿詠草〕○宮内廳書陵部所藏

（六月）同廿五竹内殿（良鎮）御勸進御短尺

月

山科言國ノ歌

目にみえぬ人の心をてらすこそくもらぬ月のかゝみ成けれ

忍戀

秋ふかき木の葉の下のむもれ水音にたてぬも色やみえなん

旅

旅衣かさなる山を昨日といひけふは舟路の浪を分つゝ

小御所ノ梅

宮女、觀梅ノ酒饌ヲ獻ズ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月廿二日、小御所の梅に、上らふ・新す・大す・こうたう、御てうしまいられて、御さか月ゟ、

御還禮勝仁親王御參内

三月四日、一日梅事の御わんれゐ御さたあり、御かわらけの物いろ〳〵にて、御ひし〳〵にて、みな〳〵めてたかりまいらせらるゝ、宮（勝仁親王）の御方もなる、おりふしみえさせますとて、おり一かう・御たる一ゟ、かさねて御さか月ゟ、○下略

二十三日、壬子、權大納言三條公治ヲ罷メ、權中納言三條西實隆ヲ以テ之ニ替ヘ、前參議綾小路俊量ヲ權中納言ニ任ズ、

〔公卿補任〕四十四

權大納言從二位藤公治（三條）、四十九、二月廿一日辭、
權大納言正三位藤實隆（三條西）、廿五、二月廿三日任、公治辭替、
權中納言正三位源俊量（綾小路）、廿九、二月廿三日任、元前參議、位爲廣下

〔實隆公記〕二月十四日、癸卯、霽、○中略民部卿（白川忠富）就予昇進事、有示旨之間、何樣來月可申請之由、返答了、○下略

實隆御禮ニ參内ス

廿一日、庚戌、○中略今日公治卿亞相辭退事、以永種申送勸修寺（教秀）許云々、
廿二日、辛亥、予昇進事、先日以民部卿内々有仰之旨之間、晩頭以書狀示民部卿許了、○下略
廿三日、壬子、天晴、風靜、予昇進事勅許之由、女房奉書到來、畏入之由、且向勾當局申之、及晩著衣冠參内、冬袍借用中御門大納言（宣胤）了、被召三間庇御對面、山科宰相言國卿申次也、昇進事、乍過分畏入之由、申入之處、任槐之事、相續而則可有御沙汰之由、被賀仰、尤祝著滿足者也、暫雜事等、有勅定之子細等、小時大納言典侍・新典侍・勾當内侍等、於御前有盃酌事、澁野井（澁野井）教國卿・言國卿同候之、退出之後、參宮御方、又參伏見殿（邦高親王）、歸家、于時斜陽之程也、○下略
廿六日、乙卯、○中略今日師富（中原）朝臣、持來宣旨、○下略

人々實隆ニ昇進ヲ賀ス

廿八日、丁巳、○中略遣使者於師富朝臣許、送一腰了、
廿九日、戊午、○中略抑此間就昇進、賀來人々濟々焉、聊依心中不平之事、不能委記、
三月六日、甲子、天晴、於滋野井、謁上乘院、一盞有興、則又來此亭、携太刀被賀昇進、謝遣之、及晩姉小路宰相（基綱）入來、中山中納言（宣親）持太刀來、數刻雜談、
八日、丙寅、天晴、及晩雨時々降、雷發一聲、○中略右府（花山院政長）被送使者、諸大夫、昇進事被賀之、新中納言俊量、入來、同賀來者也、
十五日、癸酉、天晴、○中略參東山殿、當年初度也、就昇進進上太刀、申次、大館刑部大輔（政重）也、歸路於堀川局里傾數盃、酩酊、又向青蓮院・建仁寺・二條亭（持通）・西園寺（實遠）・花山院・中院（通秀）等、醉裏忙然也、

實隆諸所ニ廻禮義政ニ太刀ヲ進ム

十七日、乙亥、晴、今日參小河（日野富子）御所、其外所々令參賀、○下略
廿二日、庚辰、晴、江南院（寂鬱）・冷泉中納言（政爲）等入來、及晩勸修寺大納言・樂林軒（綾小路有俊）等入來、又小倉宰相中將（季種）昇進事賀來、○下略
四月十日、戊戌、雨濺、自西園寺有使者、案主（後守）筑、先日罷向事被謝之、同昇進事被賀送者

大内政弘實隆ノ昇進ヲ賀シテ太刀等ヲ贈ル

也、○略下

九月十八日、癸酉、天顔快晴、○略中大内左京大夫政弘書狀則到來、就昇進事、太刀・用脚等送給之由也、便船近日可著岸云々、周防事□□□□□秘藥龜ノ尿ニ麝香ヲ入テ入之、則得効驗了云々、立得驗□□□□物語等、依政弘朝臣所望談之由等同語之、○略下

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月廿三日、○略中侍從中納言せう（三條西實隆）□□□（しんのカ）御れゐにしこう、

廿四日、○略中源宰相（綾小路俊量）もせうしんにて御れゐの申、

上首ノ當官六人前官六人ヲ超越ス

〔宣胤卿記〕二月廿三日、壬子、晴、○略中自侍從黄門（三條西實隆）折帋到來、今日昇進事勅許、爲參御禮、冬袍可借云々、付使遣之、上首當官六人、滋野井中納言（正親町）教國卿・日野中納言（廣光町）卿、・藤中納言（武者小路）緣光卿、・冷泉中納言爲廣卿、・權中納言（公兼正親町）卿、・冷泉新中納言爲廣卿、等也、此内廣光・緣光・公兼等卿一位子也、可有所存歟、前官者親長（甘露寺）卿不可昇進之由事舊了、・在治（唐橋）卿・經茂（勸修寺）卿・隆量（四條）卿以上四人ハ、去年予昇進之時、加滋野井五人、已以令超越、・實仲（四辻）卿・季經（四辻）卿等也、超越數輩、丞相子之故也、猶可謂早速歟、次女房奉書宣秀（中御門）方到來、侍從中納言大納言事可宣下云々、侍從兼帶歟、又闕誰哉可尋、○略下

宣胤實隆ノ昇進ヲ賀ス

廿四日、癸丑、晴、○略中次向新大納言許、賀昇進事、對面、聊言談、次歸家、前宰相俊量卿、來、就闕納之事、勅許可仰職事之由、女房奉書如此、宣秀可宣下云々、以昨日分亞相同日一帋也、

實隆拜賀

三月十七日、乙亥、晴、○略中新亞相實隆卿、被來、年始御禮、東山殿（義政）等昨日參云々、

偶々家領美濃國衙ヨリ上納セシ用脚ヲ以テ拜賀ノ費ニ充ツ

〔親長卿記〕二月廿三日、晴、○略中侍從中納言實隆、任大納言、前源宰相任中納言云々、侍從中納言第七中納言也、可昇進亞相之輩現任超越人々、廣光、第二、緣光、第三、政爲、第四、公兼、第五、爲廣、第六、實隆第七、也、如何々々、

奈良ヨリ樽酒ヲ召寄ス

〔實隆公記〕六月八日、乙未、天晴、○略中歸路向都護亭（甘露寺親長）、○略中拜賀事等、聊有相談事、○略下十日、丁酉、天晴、及晚雷鳴暴雨、○略中師富朝臣來、○略中自他奏慶事等相談、○略下七月□□（三日）、□□（戊午）、陰晴不定、自晚雨降、入夜甚、○略中抑濃州國衙用脚貳千疋、今日到來、拜賀事、大略以之可令治定、自愛者也、三日、己未、雨降、來八日奏慶可必定之由、今日内々申送所々、裝束等事、可召渡之子細等令治定了、○略下

四日、庚申、天晴、甘露寺中納言（元長）入來、談拜賀間事、○略下

五日、辛酉、陰晴不定、師富朝臣來、今朝差下使者・人夫等於南都、樽酒等爲召寄也、

實隆拜賀ノ儀ニツキ甘露寺親長中院通秀ニ諮ル

通秀洞院公賢拜賀ノ記錄ヲ所持セズ

○下略

七日、癸亥、天陰、夕立雨甚、入夜又如車軸、○中略□（今）日南都樽等到來、○中略抑拜賀間事
幷不審題目等、兼日按（親長）察卿・中院（通秀）前内府禪門等問答子細等續左、○中略在重來（勘解由小路）、明日爲身
固可來之由命之、日時勘文・拜賀著陣兩通可調進之由同命了、
次第返賜候了、御拜賀來八日之由承候、珍重存候、雜色狩衣雖下品候、安間之事候、
一行列事、前駈・笠持先行之儀、主人□（明）□□□□（次）之事候歟、只後のかた□□小雜色
取松□地下前駈取松明在右方、一行、次主人、次如木雜色、次小雜色少々、
古儀如此候へ共、當時者悉取松明先行、貞治比もか樣に候し、次主人の笠持、次扈從殿上人、此分得所見候樣候、前駈
の雜色ハ、松明をも取候ハて、只傍にそひ候て、松明なと取次候歟と存候、
一就殿上之時、可被略揖之條、御家說候者、不能左右候、立歸道理候者、沓揖可略
之條、不甘心候、
一直衣始前駈事、大略衣冠候歟、束帶不見及候樣候、
一中園（洞院公賢）相國左府拜賀之記、不所持候樣存候、可引見歟、扈從公卿ニ引馬候事、對主人禮
ハいたく候ハぬけに候、隨身引候事、於仙洞賜御馬候時、御隨身引出し候やらん、さ

親長トノ問答

も候ハヽ、隨分ある人可得便候樣存候へ共、無所見候之間、不及覺悟候、御直衣始之
時、下袴御新調候へきやらん、爲通世（中院）朝臣、必可申渡候、拜賀ハ廿日比なと存候、そ
れさへ不定、珍事候、謹言、

七月五日　妙益（中院通秀）

都護問答

一殿上疊事、追而事候、先一往被仰候後、及違亂候者、二十疋許御下行候哉、
□事候歟、但毎度注進仕候、之後可有御□□可有御問答候、毎度此分候歟、
一□□□（著陣事）陣官人訪公事次候間、三十疋計可然候、但今度任槐與御著陣被仰合之由、已風聞候之間、例式御訪、自兩方半分宛可給
之由、定可申候、然者よも五十疋にてハ領狀申候ハしと覺候、御參ニて候ハヽ任槐方を本と沙汰させられ候て、
何候哉、黃門拜賀元日ニて候し、二十疋計被下行候哉、
其餘事如形御下行可有やらん、
候哉、但近日儀如何候哉、
一官方吉書同覽度存候、但今度公事悉外記役候間、若就私著陣、小訪なと可申候歟、先
可爲同事候歟、左府兵仗事、被宣下候者、下行事可相談之由存知ありけに候、御談合可然候、さ候ハてハ陣官も
年著陣時ハ、於史者不及訪之沙汰候き、件日平座之次候ツ、惣而先規史訪事、不及沙汰
雖然藏人方吉書も辨下知史候間、官方も可入事候、是も今分ハ與陣官惣而公事之次ハ著陣之時、陣官計如形下行候、

延德元年二月二十三日

定二百疋許可然之由可申候、史同前候、之由存候、如何、〇下略

入道内府問答

一拜賀申次事

可與奪之由、被仰貫首之條勿論歟、

於禁中非職雲客（近衛・外衛將等、常事外衛未見及候、）勤之條連綿候歟、近來幽玄之間（是者不及先規之沙汰道理勿論候歟、）猶慥所見可引見候、但違例氣ニ□（ヒ）茫然候、

一□　□公卿職事等未拜賀以前、爲人之扈從參仕、事了、同夜遂拜賀、可行湯漬以下吉書等殿上之儀之條如何、

一殿上疊、（内侍所候やらん少下行ニて令敷候しやうに覺候、）當時閑日不敷之候、不敷者、拜賀之日不著殿上之條先規候共、心やましきやう候歟、拜舞了、自高遣戸可堂上候歟、假雖不著殿上、自殿上口可昇歟、

一行列事

乘車時、（前駈等）上臈在左、（同心申候、此次第近日大概加愚案候、）下臈爲右、歩儀、上臈在右之條、連綿候歟、雖其憚候入見參候、當家乘車之時、以右爲上之樣聞置候、但不分明候、此說被聞食及事候哉、存知度候、何樣歩儀與車之時、左右相替條、通例勿論候歟、不審候、可勘給候、

通秀トノ問答

出立所トシテ甘露寺元長第ヲ借ル

裝束類ヲ義政以下ニ借ル

三條實房ノ笏ヲ轉法輪三條實香ニ借ル

一點陣家可出立候、退出之時直可歸私宅候條如何、必先可立歸出立所事候哉、（普通此分候歟、）八日、甲子、天陰、及晩晴、今日可奏亞相慶也、就陣外借請甘露寺中納言亭、自彼所可出立也、委旨注別記、雜事等少々記之、

一裝束事

兼日以堀川局、申入東山殿、今朝書目錄遣傳奏（勸修寺教秀）許申渡之、扈從人々、前駈裝束以下、悉皆被渡之、但前駈袍一具闕如、借請勸修寺亞相了、

一笏事　申請（轉法輪三條實香）三位中將家、（三條實房）建久左大臣殿御笏也、先年參議拜賀時、用此笏了、殊自愛祝著々々、

一有文巡方帶

一紺地平緒　此兩種借渡宗綱卿了、（松木正親町西實澄）

一螺鈿劔　用右頭中將物了、

以上

一犀角帶　三腰、一愚物、一甘露寺、一松木、（阿野料）

一阿野少將（實千）太刀・平緒等予物渡之、隨身一人裝束、皆具、借請藤中納言（高倉永豊）入道、雜色狩衣二具、・笠持白丁・笠袋等、借請勸修寺大納言、阿野少將扈從事、俄可參之由、示送之

延德元年二月二十三日

間、且者本懐之間、装束以下方々予令馳走者也、
一前駈兩人、笠持白丁、一具中院、袋同、一具松木、袋同、
一如木事
鷹屋兵衛三郎譜代之雑色也、仍申付之、代物百疋下行之、装束事、可然之様沙汰之、
可出立之旨仰之、訪事有歎申旨、追而可申付之旨加下知了、
一雑色事
亞相雑色三人借請之、此内兩人者可沙汰送之由也、仍一人予訪事令下行之、
源亞相(庭田雅行)、一人、中御門亞相(宣胤)、一人、中御門新亞相(松木宗綱)、二人、藤中納言入道、二人、甘露寺中納言、一人、頭中將、實澄朝臣、一人、
以上八人、自他所被送之、仍愚分無不足之間、兼日用意之子細無益之間、俄省略之、具十餘人也、
一雑色狩衣借用所々、雑色烏帽子難得、所々借請之了、
二具　愚物一、□潤色令著被官衛門男、一　間不用之、
二具、中院、二具、中山、一具、藤中入道、

實隆ノ拜賀ヲ祝シテ人々物ヲ贈ル

此内愚物一具、中院一具、不能令著用之、愚分三具、殘二具前駈二人之雑色著之、
一笠持白丁并袋、借請藤中納言入道物了、
一仕丁事、美豆御牧人夫三人・富森二人召寄之、三人著白丁、爲予分并前駈、笠持等一人令荷松明了、
一一獻事
如形可爲三獻之由、兼日相談佐渡守親繼(後藤綱之)、令下行其用脚、樽等召渡了、座席事、亭主可然之様、可被相計之由憑之、敷設闕如之由、示送之間、愚亭疊今日運渡之、雑色酒肴、仰如木、自方々來雑色共、能々可勸盃之由、加下知、賜樽酒等了、
一今日樽以下芳惠所々、次第不同、
中院、一荷下、兩種、冷泉中納言(政為)、一荷兩種、姉小路、二荷三種、山科、一荷、基春朝臣(持明院)、同、右頭中將(正親町西實澄)、同、松木(宗綱)、同、庭田(雅行)、同、花山(政長)、二荷兩種、中山、一荷、菊第(公興)、一荷、和長(東坊城)、一荷、勸修寺(教秀)、二荷、都護(甘露寺親長)、一桶、三品羽林(轉法輪三條實香)、一荷代百疋、以上不慮之芳惠共也、可謂眉目、
一二荷兩種、令進上禁裏了、
一一荷兩種、遣甘露寺中納言許了、

實隆物ヲ獻ズ

一一荷兩種、遣在重(勘解由小路)了、

一陣官人訪事

可爲百疋之由、雖歎申、就任槐宣下著陣之儀也、別而雖不可及訪沙汰歟、爲祝言之間、五十疋分可下行之由、申付之、則令下行了、於閑所、聊勸盃酒歸了、

一六位史盛俊(安倍)來云、今夜著陣、雖不相觸、申文等致用意了、如何之由、雅久(小槻)宿禰示送之云々、慇懃之儀、尤喜入者也、俄著陣、纏頭之餘、不能觸遣、仍雖無念、於申文者、可略歟之由、思給處、態示送之條、返々喜悅之由謝之、勸一盞了、

一殿上疊并掌灯以下事、内々兼日雖示管領頭、不審之間、先日民部卿參會之次、今夜新藏人懷行(孝)拜賀、殊殿上之儀可爲嚴儀、前後雖遲速、相構疊以下每事無相違之樣、可入魂之由命之、掌灯事、御藏□□□□□者、可下行之由支度之處、無音之間、不能其儀、

一房弘(冬)(堀川)左近府廳頭、陣掌灯以下々行事申之、公事次不可及其儀歟、但有所存者、重而可來之由示之、翌日注一帋來之間、二十疋令下行之、自桃花(一條冬良)奏慶事令賀仰之書札持來之間、召出前勸一盞了、彼注進一紙、爲後鑒續之、

左近府陣疊役御訪　木工寮御結燈臺御訪　掃部寮軾御訪　陣掌燈御訪

已上此本御下行者百十疋、御宣下之時、公武共ニ御下行勿論候、然間、以加樣之御宣下之御次、御著陣之御方々樣者、每度雖公武儀候、就御著座、別而公私爲御祝言、御太刀代此諸司ニ御下行事、不限御本所樣、如形被下候、□□□□陣官人雖爲少事、御下行之上者、可然樣ニ、此由預御披露者、可可(行)目出度候也、仍諸司言上如件、

長享三年七月八日

帥黃門(町廣光)・冷泉黃門・山科相公等入來、勸一盞、姉小路宰相、今朝入來、今夜可來臨出立所之由、堅約之處、及晚送書狀、故障間、不可來之由示之、無念之由報了、師富朝臣來、可來出立所由命之、勸一盞、謝返了、

一行列事、書折帋堅可下知由、仰重種、又四辻前黃門・滋野井等、可有入魂之由申了、雜色六人、取松明前行、次前駈二人、取松明前行、一列、主人右方、下臈前行、前駈之僮僕不取松明可在傍、次主人、次如木雜色、取松明、次小雜色少々、不取松明、如此下知之處、不取松明之雜色等猶以前行、不可說事也、不能制止有若亡之次第也、次主人笠持、次前駈笠持以下、次扈從殿上人、一列、上藹爲先、

持明院基春等ニ太刀ヲ贈ル

諸所ニ廻禮

〔二〕
□□□

□沓脫著沓時、一度、出門時、一度、入四足門時、一度、以上可爲三ケ度之由、仰含之處、出四足門之時、又欲追之、一聲之處、人々制之、所詮此時一向可追之條、不可有苦者也、制止之條、却而不可然歟、凡當時僮僕等有若亡、無念事也、略○中

酉刻著衣冠、誦經等頂戴之、先罷、移甘露寺亭、前駈裝束事等申付之、相待藤中納言入道來者也、拜賀之儀了、直歸蓬屋、一盞祝著、則就寢、今日無一事之違亂、天氣快晴、尤珍重也、于時丑刻計歟、此後又雨降云々、頗奇異之天氣也、猶以自愛々々、略○下

□□□□〔九日乙丑〕□　□□□〔入夜〕月朗、滋野井・四辻・右頭中將・阿野少將等朝飡請伴、所々裝束等以使者返之、又昨日芳惠之所々幷雜色等送給所々、以使者謝之、遣太刀一腰於持明院中將・阿野少將・右少辨守光〔廣橋〕等許了、又一荷一種、遣藤中納言入道許、遣一荷兩種於甘露寺中納言室方了、甘露寺中納言・持明院中將等、携一腰來、各勸一盞、在重・壽官〔小槻長興〕入道等來、同勸一盞、略○下

十一日、丁卯、天晴、雨時々濺、略○中□□□□〔納〕言許謝先日之儀、又向都護卿許、盃酌之儀祝著、歸路參安禪〔芳知惠春尼〕寺殿、向德大寺亭、左相府對面、謝先日之儀、略○下

十六日、壬申、天晴、略○中左大辨宰相〔葉室光忠〕入來、予拜賀事等、父卿〔葉室教忠〕被賀儀也、則對合謝遣了、略○下

十八日、甲戌、天顏快晴、殘暑如蒸、略○中小時詣禪閤〔玄通〕二條亭、對面、先日拜賀著陣間事等語申、略○中凡公事儀、每度丁寧尋申之條、感悅無極、今度拜賀著陣等之進退神妙之由、聞及之間、尤自愛之由、慇懃芳言在之、頗令祝著者也、良久退出、略○中自禪閤有使者、月輪少將家季也、先刻參仕、先日拜賀之事等被仰之、對面謝申了、

〔實隆公記長享三年春夏紙背文書〕

○六月六日至九日裏

尙々能々可得御意候也、

御拜賀日次之事〔裏脫カ〕仰候、今月下旬廿七日・來月上旬□　□廿六日けに尤萬々歲珍重存候、日時勘文事、御治定日限、重而可被仰事、致其覺悟候、仍六月三日かのえとらニ支干共とりあて候事ハ、あなかちに六十一年にハ不定候、支ハかりなとの一年に相當事候、永享四六月三日かのえと存候し、茲□〔以カ〕自餘可被伺賢慮候歟、略○中

六月□〔長享三年〕日

宮內大輔殿　在重狀

○六月十五日
至十九日裏
○上闕ク雖然一向不事行、子細過高察候、如今者大略不定候、抑御奏慶、今月邊御治定候
様、誰哉らん申候、如何被沙汰候哉、且珍重候、彼仗儀御參度丶□ 」察存候、雖無指
事、久閣筆候間令啓候、心緒以面展可申承候也、謹言、

（長享三年）六月七日　（徳大寺實淳）（花押）

（切封ウハ書）
「西殿　（花押）」

大納言ノ奏慶ニ藏人頭扈從ノ例

〔實隆公記長享三年秋紙背文書〕

○七月七日裏

昨日給芳札候之所、罷出不申愚報候、御奏慶八日御治定、目出候、□□（仍亞カ）相拜賀、藏人頭
扈從例も無餘儀候、□月ハ不見出候、故有光（日野）一品于時大納言、「 」□□藏人扈從候ける、○有光、權大納言ニ任
ゼラル丶コト、應永二十八年七月五日ノ條ニ見ユ、旁期面拜候、恐惶謹言、

（長享三年）七月四日　□□（教秀カ）

○七月八日裏

又西園亞相之事、此次被宣下歟之由存候處、昨日勅定之趣、自西園被申入候者可有御沙汰
定可存申候、勘申候、恐入候、

之由候つる、此次被申候へく候、自然可有御入魂候歟、
今日之儀御治定仕候、珍重候、可參申候、時分渡御□候哉、條々爲得御指南、先貴亭へ可參心中之處、取亂候之
間遲々候、何樣可參申候、任槐宣下陣儀治定云々、著陣事ハ彼宣下次候ハヽにて候うへ、可然候、
猶陣官人以下、可加御問答心中候、所詮五十疋下行と心得置候、可然候、宣下方にて御訪治定候者、三はかり分御問答可然候、此間ハ少分二ヶ許下行高
と候云々、結燈臺許申候歟、其も十疋御下行候歟、夏弘（大石）申候ハヽ可爲如何候
哉、著陣於申文者可省略仕候歟之由存候、可有賢慮候、御拜舞深泥候者可用雨儀候歟、陣西簷下陣座
北二間南柱程可然候哉、如何、條々可被勘下候、可然候、恐惶謹言、

七月八日　（長享三年）　親長　實隆

○七月八日裏

御大儀察申候、
八日之儀、既至今日候、未具子細共繁多、於于今計會仕候、無益事ニ取懸候と存計候、比
まつ任槐與兵仗宣下事治定候て、其次御著陣候ハヽ、下行事外わすかに
興々々、任槐宣下事、陣儀□（承存）候、被申下候由候、仍可遂著陣之由存候、條々御不審一紙且注進、愚意分注付候、
て候ハんする物を、任槐與著陣ニ被仰合候由候や、六位史も陣官も存知候間、自兩所可給御訪之由、申候由承存候、
候、委細勘給候者恐悅候、今日必可參啓心中之處、聊故障事出現之間、先染筆候、旁期
就御著陣如此御下行候者、已後例むつかしく覺候、
拜顏候、恐惶謹言、

〇七月八日裏

七月六日（長享三年）

親長
實隆

纏頭子細候間、勘進爲恐候、御經營察存候、懐幸同□陰晴不定、御奏慶不審候處、忍雨□□期申候、
闕如□　□候、基春朝臣□□にて可早參之由申候、猿を木にあてたる風情こてこそ候へ、勿論此儀も可申心中之處、遮
厚恩□旁可參啓仕之處、故障間先申入候、兵仗事、宣下勿論候哉、同奉存
而承候、相似懈怠候、必々可有宣下候、
度候、條々期參拜候、恐惶謹言

（花押）
實隆

七夕後朝（長享三年）

〇七月十日裏

文のやうひろうして候、まことにてんきよくなり候て、御しうちやくをしはかりおほし
めし候、〇略中又この二色二かあら〳〵しようの御事候や、さりなからめてたくおほしめ
し候よし、よく〳〵心え候てよく〳〵申とて候、かしく、
□□ようや

（ウハ書）「御事」

四五〇

〇七月二十八日裏

珍簟御座右、何等事令見給哉、炎暑蟄居、如歴□物候、近日可出頭之由存候間、最前可
參申入候、御奏慶近之由承候、尤珍重々々、濟繼（師小路）于今可令前駈之由存候處、時節不幸之
到候、御任槐之御慶、雖不可有程候、愚老ハたゝ今度も連軒之一分ニ加參度之心中候、
但毎物不具、於今度者、不可事行候歟、申度事如山岳候、あな〳〵御片思候や〳〵、心
事期後音候、誠恐謹言、

七月四日（長享三年）

基綱（師小路）

（切封ウハ書）「西殿三條殿」

〔後法興院政家記〕七月十七日、癸酉、晴、大藏卿（勧修寺經茂）來相語云、去八日侍從大納言實隆卿
奏慶著陣之時、起奥座、著沓向直處、裾末板敷ニツマリテ無了簡間、陣官乍著沓膝行、
裾ヲ引下云々、希代事也、〇略下

〔親長卿記別記〕六月八日、晴、〇略中及晩新大納言實隆、來、近日可申拜賀、可借用
予亭云々、云改元參仕、云拜賀出仕、旁以不思定云々、愚亭事、思案間事候、可仰中納
言之由、返答了、

〔親長卿記〕　七月八日、晴、○中略及晩詣正親町宿所、今夜侍從大納言〔慶脱〕奏也、基春朝臣左府沙汰・阿野少將遣云々・實千扈從、公卿・殿上人等不及廣云々、○下略

〔久守記〕　○宮内廳書陵部所藏　七月八日、晴、甲子、

一三條西殿大納言拜賀候也、本所（山科言國）御出候、柳一か・干鯛三・コフ被持候也、

〔實隆公記〕　十月十六日、庚子、天晴、時々液雨、入夜月輝朗、○中略源中納言（綾小路俊量）、此夜拜賀、不著殿上、自高遣戸堂上、如木雜色一人、童一人、小雜色五人、申次宣賢、

三千院堯胤法親王、同院領播磨安室郷ノ代官職ヲ、月輪房ニ宛行ハル、

〔三千院文書〕　四○山城

門跡御領播州安室郷院米百餘貫文御代官職事、所被仰付也、任請文之旨、可被執沙汰、無不法懈怠之儀ハ、不可有改動者也、仍執達如件、

長享三年二月廿三日　任藝

月輪房

禁裏御料所美濃革手郷、年貢ヲ進納ス、

〔久守記〕　○宮内廳書陵部所藏　二月廿三日、晴、壬子、

一ミのより、今日拾貫文分上候、今日五貫文渡之、請取遣之、請取自濃州新足拾貫文分候也、

三月

三月一日、晴、己未、

一齋藤丹波方より人上候、本所百疋・予百疋・大本庵百疋、御月宛千疋分也、本所分ハ本所へ進上候也、

九日、晴、夕雨風、カミナル、丁卯、

一革手郷月宛今日納、

四月

四月十二日、天晴、庚子、

一濃州下候右衞門、今日上候、則禁裏此分予參申候、長橋御局、

廿七日、乙卯、

一齋藤丹波方之狀到來候、禁裏三千疋御借錢、革手月宛千疋、今日渡候也、予禁裏參申之、

七月

七月三日、晴、己未、

一濃州革手郷御月宛千疋上候、狀付候也、

四日、晴、庚申、

一革手郷千疋今日納候、アキ人候也、

九月八日、晴、癸亥、

一革手郷千疋月宛上候也、

〔久守記〕○宮内廳書陵部所藏　五月三日、晴、庚申、

一多藝庄御請取出候とて、商人可下之由候間、此方請取下、丹波方へ匂貝廿下、代七百文、金銀薄ヲヲク、商人酒のみ候也、

美濃國多藝庄御年貢爲引替、參千疋到來、勾當内侍局請取狀如此、

長享參年五月二日　　傳奏也、判

勾當内侍殿御ふみヒ傳奏判

たきの御ねんくひきかへ候て、三千疋まいらせ候、めてたく候、ゝ〻、

○三月以後、革手郷・多藝庄、年貢ヲ進納スルコト、便宜合敍ス、

禁裏御料所美濃多藝庄年貢ヲ進納ス

二十五日、甲寅、義熙、北野社法樂和歌ヲ詠ズ、

〔常德院集〕（長享三年二月）廿五日、聖廟法樂とて、五十首歌人々よみ侍しに、社頭梅

さくむめの花のにしきを手向山春吹かせもかみのまに〳〵

近花

あかすみるにはを盛の花ゆへに軒はの山のかけやくれなん

浦月

いせのうみやしほひのたつのこゑたけてわかの松原月さえ渡る

積雪

松はみとりまさらむとする誓よりふりをける雪をあハれとそ思

切戀

たゝたのめいはゝや物をいつはりになさむかきりのはてをしらすハ

名所夜

つゆも猶ゆるさぬ月の袖のうへにいく夜か宿をかるかやの關

薄

吹かせの音もなつかし花薄なひく籬の秋のゆふくれ

名所擣衣

延德元年二月二十五日

いにしへを思ひみたれて陸奥のしのふの衣誰かそふらん

義政、九條袈裟ヲ相國寺大智院耕金軒主周在（寶處）・知恩院珠琳（周譽）等ニ與フ、尋デ、掛絡ヲ南禪寺正因庵仙館軒主景蓮（蘭坡）・東福寺住持桂悟（了庵）等ニ與フ、

袈裟縫僧

袈裟掛絡等ノ寸法

〔陰凉軒日錄〕（○尊經閣本）　正月廿一日、不參、天快晴、（略○中）晚來自調阿方書來云、爲本可有台覽、諸院之卵塔、可進上之由、有命云々、御本定後、袈裟縫僧可參之旨有之、返章遣之、

二月十四日、不參、天晴、早旦信藏（周信）主來、剪裁御袈裟并御掛絡、御袴三、一具三丈四寸、一具三丈六寸、一具二丈九尺二寸、以上九丈二寸、（略○中）以御袴三、剪裁九條二頂、一丈不足、以御道服足之、以道服三領、剪裁御掛絡十二頂、又以九條不足之道服之餘、剪裁御掛絡二頂、其餘賸少有之、信藏主、暮夜院宴之、（略○中）九條二頂・掛絡一頂度之信上司、

十六日、不參、天降雨、自昨晡未罷、（略○中）寶香・明貞來、勸晚飡、御掛絡四頂度之、明貞可縫由命之、（略○下）

十八日、不參、天洒雨、（略○中）晚來信上司來、御掛絡一頂、縫之持來、又二頂度之、貞首座（明貞）方江一頂度之、（略○下）

縫賃

十九日、不參、天快晴、（略○中）御掛絡四頂、禪昌庵江度之、（略○下）

袈裟ノ謝禮

廿日、不參、天快晴、（略○中）摠持院（龜山性蹄尼）御對面、有宴、（略○中）寶處（周在）袈裟之事、久御約束也、無相違有白沙汰者、御悅喜云々、爲其乎、自最初九條二頂可縫之由有命、若又可賜智恩院（知、下同ジ）・百萬遍（珠琳）等之用乎、方丈御一唉、（略○下）

廿一日、不參、天快晴、（略○中）自禪昌庵御掛絡二頂來、御掛絡地二頂分、遣鎭季安（梵鐘）、（略○下）

廿二日、不參、天快晴、（略○中）御掛絡四頂、明貞比丘持來、（略○下）

廿四日、不參、天快晴、（略○中）御袈裟二頂・掛絡二頂、信藏主持來、留之、瑞春同途、加看經衆、縫賃十三度信藏主、（略○中）自禪昌庵御掛絡二頂來、縫賃五ケ度之、自貞首座・鎭書記、御掛絡各一頂來、自鎭書記一頂返之、乃遣之禪昌庵、以上五頂也、

廿五日、天快晴、（略○中）九條一頂贈寶處和尙、蓋一昨日以堀河殿被仰出、自愚方可遣云々、請取乃昌子（盛文樂昌）持來、寶處搭彼御袈裟、爲禮謝來、對話有刻、自禪昌庵掛絡一頂來、縫賃昨日贈之、晚來謁東府、九條一頂・掛絡十四頂相副、御道服・御袴注文、以御阿茶供台覽、又九條一頂、寶處和尙請取、亦供台覽、相公曰、九條一頂、可賜智恩院、以故被留置御前、掛絡

慈樟ニ掛絡ヲ與フ

十四頂、可被遣之仁體可書進、乃以書立供台覽、可爲如此云々、乃退出、紫色御掛絡一頂、遣之小補(景三)云、可傳廷材(慈樟)西堂、留守之故、請取自小補(横川景三)相調可賜云々、略○中廷材御掛絡請取、昌子持來、略○下

景蒞 桂悟 壽郁 聖松 慈昌

廿七日、不參、天快晴、略○中御掛絡、蘭坡(景蒞)・了庵(桂悟)・文林(壽郁)・惟久(聖松)・九華(慈昌)五頂度之、蘭坡・了庵請取到來、略○下

廿九日、不參、天洒小雨、略○中自靈泉就陞座嚫金之事有使、仍傳語方丈・大統・清住(乾仲宗亨)云、可進掛絡、調請取可賜人云々、惟久西堂、伸掛絡之謝、

掛絡ノ謝禮

三月朔、己未、不參、天快晴、略○中普門寺慈昌西堂九華來、伸掛絡謝、不面之、略○下

三日、不參、天快晴、略○中蘭坡・了庵・文林來、伸掛絡之禮謝、皆不面、略○中晚來廷材西堂來、伸掛絡之禮謝、略○下

智岳 周薫 景照 等階 宗亨

五日、不參、天快晴、略○中御掛絡各一頂、雲居松嶺(智岳)・三會舜澤(周薫)・天龍高先(景照)・北等持蓂瑞(等階)、以久子(巢久)贈之、略○下

六日、不參、天晴、略○中享(亨乾)健仲(宗亨)來、伸掛絡之謝、以久子御掛絡各一頂、遣雲居・三會・天龍・北等持、略○中四ヶ所掛絡之請取々之來、於華藏院有宴云々、皆謝詞丁寧、略○下

東寺長者大覺寺性深祇候

七日、不參、天洒雨、略○中自珠恩院狀來、見伸寶處袈裟之謝、時有桃花一枝贈之、

八日、天快晴、齋罷、謁東府、略○中以冷泉殿、御掛絡拜受之折帋十四通供台覽、略○下

八月八日、天快晴、略○中等持院曰、御袈裟以下縫賃書立可賜、有餘錢者、可令下行云々、金山次郎御佛事錢三十貫文未渡之、以故下行帳未進之、

九日、不參、天快晴、早旦遣昌子於龍珠軒、御袈裟以下縫賃幷諸色書立可賜、以其可遣等持院、返答云、只今失所在、相尋可進云々、略○下

十日、不參、自五曉天降雨、略○中齋罷、遣昌子於龍珠、督諸色縫賃之書立、以他適無返答、彼書立草案在此方、又淸書以加昌子判形、召信上司加判形、相副愚一行、遣出官於北等持、乃返章有之云、時寺官他出、歸寺者乃可白付云々、略○下

十七日、不參、天快晴、齋前遣昌子龍珠軒云、諸色下行事、命等持院、昨日以出官贈之、乃召信上司渡之、爲御意得白之、略○下

二十七日、丙辰、東寺ノ佛舍利ヲ奉請アラセラル、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　二月廿七日、略○中とう寺の御しやり御ちやうたいあり、大かく寺(性深)しこう、せんきとてくろとにて□(かカ)らひつうちへ入によりてうとらるゝ、(け脫カ)

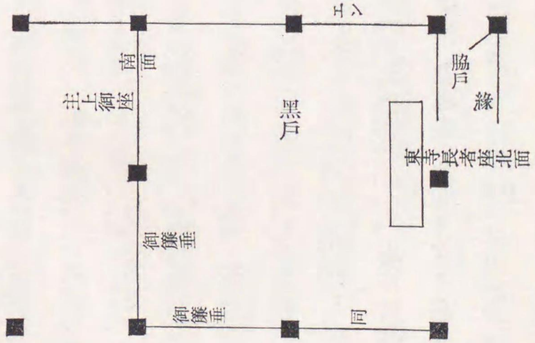
黒戸ニテ行ハセラル
奉行中御門宣秀
九粒
奉請ノ人々

ふ行のしきし左少辨（中御門宣秀）、御れんあくる、大かく寺やかて御いたゝきあらせらるゝ、御所々々ハにしのみすのうちに御入あり、女はうたちもおなし、御しやりせんきのとく九りうゝ、そのほかふしみとの（邦高親王）・仁わ寺の宮（道永法親王）・しもかわら殿（上乗院）・くわんしゆうしの宮（常信法親王）・ひん（義政）かし山殿（義熙）・むろまちとのなとへもゝ、てんそう（勧修寺教秀）・大かく寺（性深）そのほかやく人ともにもたふ、たかつかさとのへもゝ、ないゝのおとこたちみなしこう、下すかたのともから御庭へゝ、天氣もよくてめてたしゝ、はてゝ御てんしんゝ、おとこたちすへにてくこんともたふ、あんせん寺（芳苑惠春尼）との御ふた御所・おか殿（大慈光院宮）もなる、

〔後法興院政家記〕二月廿七日、丙辰、晴、〇中略今日主上御頂戴東寺之佛舍利、東寺長者大學寺（義覺）准后參内云々、

〔宣胤卿記〕二月廿七日、丙辰、晴、今日東寺佛舍利内裏御奉請也、宣秀可參之由、一昨日御連歌之時直蒙勅云、御祈奉行職事雖有便、賢房（冨小路）隱居之故也、爲自然御用、六位兩人可召儲之由、今朝勸修寺亞相（教秀）被申送之間、申遣極藹（源富仲）之處、依窮困、不及出頭、殊無僕之間、次座之六位事、尚以難相觸云々、仍直以使者、仰資直（冨小路）・宣賢（舟橋）之處、資直所勞、宣賢丙穢云々、兼致（吉田）河東遼遠之間、不及申遣、午斜相伴宣秀束帯、予衣冠、參内、舍利已昇居路頭、待剋限云々、勸修寺・按察（甘露寺親長）等祇候、出御之在所事被仰合、先例黒戸云々、舊院御代議定所也、其時皇居一條、無他殿之故歟云々、今度小御所尚可然歟之由、按察申之、已室禮等沙汰之處、小御所亂來荒癈有憚、尚可爲黒戸歟、兩所之間、相計可申入之由被仰下、只可爲時宜之由又申入、遂以黒戸被定了、其間經數剋、舍利路頭奉昇居、尤有恐、次東寺長者大覺寺准后性深、入西棟門、被昇高遣戸、所從僧綱三人、自同所昇殿、太不可然、尤無故實、次舍利奉入、入櫃有錦覆、退紅仕丁二人昇之、白張一人持棹前行、不知子細、其外白張前行、入四足門折北經御所西、經對屋并臺所等西、此路可爲如何哉、南方無通路之故也、入黒戸之東庭、可開東開戸之處、不斗向入北之小戸、昇居黒戸之東簀子、先之長者准后、經清涼殿東黒戸南等簀子、入黒戸之南面第二間著座、北面、次僧綱持參机、置簾外、御前、次僧綱二人昇舍利櫃、置長者前、次僧綱東寺執行、參進切封、以鎰披之、取出舍利・靈寶袈裟・鈴・鉢・念珠、獨等、次僧綱大勝院、參進、披舍利壺、裏分以薄樣裹之、此帋臨期宣秀渡之、内々進之、是方々被申請分云々、次宣秀參進、卷御簾、半許依無鈎、以帋捻結之、内々兼付帋捻、先之僧綱等出戸外、次長者參進、取舍利、乍持御頂戴、次取袈裟、同御頂戴、次長者復座、則起座、此間宮々・女房等御頂戴之故也、次長者歸座、先之宣秀垂御簾、僧綱參進、如元納之、付封勅封也、昇出之、次長者起座退出、今日舍利申出注文、勸修寺書之入櫃、毎度注文大卷在之、延文度公卿一人著座云々、今日勸修寺大納言（教秀）

可著座由、雖被仰、臨期無用意之由申之、



〔親長卿記〕二月廿七日、晴、今日東寺佛舍利有奉請事、勸修寺大納言傳奏、奉行宣秀也、堂莊嚴、予等加談合可沙汰之由、被仰勸修寺、延文度爲黒戸、仍可被用黒戸云々、予申云、於小御所可然、仍奏聞、尤可然云々、暫又仰云、小御所未半作也、猶可用

傳奏勸修寺教秀

小御所半作ノ爲メ黒戸ヲ用フ

黒戸云々、仍小間隔敷居、二間東方立廻御屏風懸御簾、敷御座爲主上御座、南面、其西方一間懸御簾、爲親王御座、其次間西方懸御簾、爲女房候所、伏見殿已下令渡此間給云々、南方副簀子爲東寺長者大覺寺准后、座、其西方敷座勅使座、東面、勸修寺大納言、非下結、不重大帷之間、不可著座之由申之、仍雖設座、不著座、暫出御簾中、奉行職事藏人左少辨宣秀、告申長者、々々著座、次御舍利舁入之、自舁中門可舁入之處、疎骨入腋之士戸、自然依用案内入不及下知進庭上陵遲云々、先從僧一人持楮、二間餘杖也、寄懸御前簾下、今度無記錄云々、自大覺寺遺舊記〔校カ〕於勸修寺、仍在此記中、予見之、退案之、更無益、仍尋大覺寺准后從僧之處、持此楮退紅仕丁前行追前之心云々、然者先持參御參之條無益事歟、兼日可有沙汰事歟、其躰爲無骨、次從僧二人舁御辛櫃、置御前退入、次執行實名可尋、持鎰幷小刀參進、解封欲開鎰、暫不開、珍事之事也、移剋開之、取出振鈴、三五〔結〕・念珠已下種々物等取出之後、取出佛舍利、先主上以下所望之方々分之、鎰封者長者出之、壺口封ハ勅封云々、予見之、案之、先有御頂戴之後、可被分事歟、不審也、是又彼記各分之後、從僧執行已下退出、閉黒戸東戸幷腋戸、雜人群集之故也、宣秀進寄簾下、卷御簾、長者持參御舍利、卽退、先假退出戸外、御燒香幷女中等可有頂戴之故也、次近臣外樣人々頂戴之、祇候之輩、權帥（藤室教忠）・勸修寺大納言 今日傳奏、於先規者、號勅使著御前座歟、傳奏と勅使多分參議也、各別歟、可尋事也、・源大納言（庭田雅行）・中御門大納言（宣胤）・中御門新大納言（松木宗綱）・新大納言（三條西實隆）、・予・滋野井中納言（教國）・權中納言（正親町公兼）・甘露寺（元長）・民部卿（白川忠富）・山科宰相（言國）・以量朝臣（勝）等也、

延德元年二月二十七日

〔實隆公記〕二月廿七日、丙辰、東寺御舍利幷靈寶等、長者准后大覺寺、持參、各參候、頂戴、

〔久守記〕○宮内廳書陵部所藏　二月廿七日、晴、丙辰、

一禁裏今日東寺シヤリマイル、長者被參候也、大師御ケサ・佛具參候也、本所御參候、

〔東寺文書〕御一之七○山城

長享三年二月廿七日

佛舍利注文

佛舍利奉請

佛舍利

九粒　御奉請

三粒　式部卿宮（邦高親王）

三粒　仁和寺宮（道永法親王）

三粒　勸修寺宮（常信法親王）

一粒　上乘院宮

三粒　東山殿（義政）

一粒　鷹司前關（政平）

一粒　長者准后（性深）

三粒　室町殿（義熙）

一粒　教秀（勸修寺）

已上廿八粒

計二十八粒

泉涌寺ノ佛舍利ヲ奉請アラセラルアラセラル

○八月二十七日、泉涌寺ノ佛舍利ヲ奉請アラセラル、コト、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲三十所收　八月廿七日、○略中せんゆう寺の御しやり御しよまうによりもちてしこう、○略下

二十九日、戊午、比叡山横川首楞嚴院ニ、同院中堂造營ノ勸進ヲ聽ス、

權大納言藤原（花押）（勸修寺教秀）

〔宣秀御教書案〕

中堂勸進事、被聞食畢、遂梵宇、、□造營、宜專道場之莊嚴者、天氣如此、悉之以狀、

長享三年二月廿九日

左少辨（中御門宣秀）判

楞嚴院（首楞嚴院）衆徒中

勸修寺大納言（教秀）在之、表同用判、横川ノ中堂也、

延德元年二月二十九日

〔宣胤卿記〕二月廿八日、丁巳、晴、〇中略壽官長興宿禰入道、來、横川中堂勸進綸旨事、宣秀早速可書遣之由、伊勢守貞宗(伊勢)朝臣申之趣演說了、此事昨日於内裏勸修寺傳仰、但勅許未慥云々、今夕以狀尋遣、故可賜(コトサラ)一通之由申了、及昏之間無返事、

是月、義熙、梅ノ枝ニ和歌ヲ添ヘテ、結城尙豐(結城)ニ贈ル、

〔常德院集〕二月のはしめつかた、瓶にむめのはなをさして、藤原尙豐(結城)につかはすとて、このうたをむすひつけ侍し、

菩提心無非中道にそむかすハ一色一香のたねやこの花

義熙、狩野正信ヲシテ、彌勒像ヲ畫カシム、

〔蔭涼軒日錄〕〇尊經閣本　二月十日、不參、天晴、〇中略狩野越前(正信)來云、江之御所可被畫彌勒之像、畫本無之、他借以賜之爲幸、愚云(臨泉集證)、於禪家無之、眞言家可在之乎、相尋可白云々、

十五日、不參、天晴、齋罷、借久昌十三佛像、命昌子(盛文集昌)贈狩野越前宅、乃返之、〇下略

京都盜多シ、

〔實隆公記〕二月三日、丙辰(壬)、霽、入夜雪降、及曉雨降、〇中略今夜東隣築地巽角、堀之

正信集證ニ畫本ノ借用ヲ請フ

相國寺久昌軒ノ十三佛像中ノモノヲ正信ニ借與フ

松岩寺ニ入ル

寄宿ノ西園寺息女盜難

今出川ニ放火ス

云々、夜盜之所爲、非無怖畏而已、〇下略

六日、乙未、陰、及晚雨降、入夜甚、〇中略抑今夜寅刻計、盜人亂入松岩寺、彼房主忽落命、六十有餘僧也、西園寺諸大夫入道也、尤不便々々、西園寺息女等令寄宿此所、悉被剝取衣裳云々、亂世不可說時分、綠林之災、貧家猶難免之、可愼々々、

〔宣胤卿記〕二月八日、丁酉、快晴、此亭東築地外令鑿堀、爲盜人怖畏也、

〔後法興院政家記〕二月廿六日、乙卯、晴、去夜子剋終巽剋有火事、盜人放火云々、〇下略

〔宣胤卿記〕二月廿六日、乙卯、晴、去曉今出川邊燒亡、盜人之所行云々、〇下略

〔實隆公記〕二月廿五日、甲寅、天晴、〇中略今夜有火事、今出川小家也、

〔實隆公記長享三年春夏紙背文書〕〇二月五日六日裏

〇上略

一近日火事事、誠第一恐怖事候、赤事・白浪、水火相剋物にて候へハ、せめて一身は休候へかしと存候へとも、萬物同樣之道理にて、白浪前後必々□田□(觀カ)(秋)邊相加候、珍事耳候、近日か樣まことに不可久候歟、西山東郊のあいたハ不及申候、帝都咫尺之間にても、畫(重カ)八郎とかやに過たるおそろしき事共候、壬生月詣可爲止之者存候、あな〳〵あちき

なの花の都候や、たえてさくらのなき世たに、春の心のかやうに候てハ、いかゝ候へき、さやうに殊御近邊心くるしき御事候らん、(猪苗代)兼載留守いかなる者候や、さやうに御東隣ほりまいらせ候てん、石木なと心さす風流士なとハし仕候事候やらん、さ候ハすハ、誠候へ共、他にハ不可有御志候、四邊の間、造意之子細仕て候ハん、賊不討貧士家とかやはむかし事にて、近日ハ□御物氈をもほしかるはかりにて、御記・御書籍等いつかたへも可被渡置候條、尤可然存候、愚慮なとハ中々たち行候とも、無用心不思儀の事にて候へく候、□(近カ)所こハ白雲文庫、可然存候、若それへもとおほしめされ候ハゝ、申入てみるへく候、○中略

二月五日　(長享三年)　基綱(姉小路)

○二月十二日至十四日裏

○上略　御近邊之物忿、未靜謐候歟、無心元存候、已没落候やらん、今朝奉存候、さも候ハぬやらん、公卿補任、先可被召置候、當時之儀、いつくとても安堵之思も候ハす候歟、三界無安□(宅)ことハりと、今更銘心脾候、諸事只心細計候、○中略

二月十一日　(長享三年)　廣光(町)

○二月二十三日至二十五日同二十六日至三月一日裏

久不染老筆候、心事積過候つる、中々又無事候様候、去比御近所白波之恐候由示預候處、〻――被存候、○中略

正月廿三日　妙益(中院通秀)

「(端裏ウハ書)　濟川叟

聽雪齋(三條西實隆)　妙益」

大日本史料

第八編之三十六

昭和三十八年一月三十日發行

價 一、八〇〇圓

著作權所有

編纂者 東京大學史料編纂所

發行者 東京大學

印刷者 株式會社 興進社印刷所 小張淺五郎

發賣所 財團法人 東京大學出版會 振替口座 東京五九九六四番 電話小石川(811)八八一四番

製本 株式會社 松岳社